

八<sup>や</sup>  
百<sup>ひゃ</sup>  
屋<sup>や</sup>  
お  
七<sup>しち</sup>

解題

本曲の著作年代は詳かでない。「外題年鑑」(寶永七年序)常流豊竹越前少掾の條に、「八百屋お七歌祭文 元祿十七年二月十五日」とある。(この正はら)。又同書に「八百屋戀緋櫻」二度目。享保十七年壬子正月二十日」とある。其の他に「八百屋お七戀緋櫻」(紀海音作、竹本喜世太夫正本。享保二年十月江戸伊賀屋勘右衛門板)、「八百屋お七江戸紫」(紀海音作、淨瑠璃本。享保四己亥八月)がある。以上の中で、本曲の「八百屋お七」と「八百屋お七戀緋櫻」とは同じ文である。(黒木勘藏氏は本曲を「鬼鹿毛無佐志登」よりも) (後で、正徳四年頃の作であらうといつてゐる)

本曲は紀海音の作中で名高い物の一つであつて、三卷に分れてゐる。

作者

紀海音は榎並氏、俗稱喜右衛門、後に善八と改めた。狂歌師油煙齋貞柳の弟である。父は鯛屋善右衛門といひ、大阪御堂前雜屋町に菓子店を出し、傍ら安原貞室の門人となつて貞因と號し、俳諧狂歌を能くした。海音は寛文三年に生れ、長じて黄檗の悅山和尚の門に入り、高節と號して大和の柿本寺に居たが、後に還俗し、大阪に住んで醫を業とし、和歌を契沖に學んで、契因又は鳥路觀などと號し、また狂歌を貞柳に學んで貞我と號した。

彼は戲作名を紀海音と號して淨瑠璃を作り、豊竹若太夫に招請されて、豊竹座附の作者となつた。其の作四十八種に及び、竹本座附の作者近松門左衛門と對峙し、二十餘年の久しきに互つて、淨瑠璃作者生活を續けた。享保八年七月、六十一歳の時に作つた「傾城無間鐘」は、其の最後の物である。其の翌年兄貞柳の後を嗣いで、鯛屋の家督を相續した。近松も其の年の霜月に歿したので、彼は相手を失つて淋しく感じもし、他にも何か譯があつて、筆を淨瑠璃に絶つに至つたのであらう。

兄の貞柳は享保二十年八月に歿し、其の翌年(元文)の夏、海音は法橋に叙せられた。それは彼が七十四歳の時で、其の時の祝賀の狂歌を集めたものに「夷の鯛」がある。寛保二年十月四日八十歳で歿した。大阪市東區八丁目東寺町寶樹寺(淨土宗)に葬り、法名を清潮院海音日法居士といふ。

「四民乗合船」(正徳四年刊)に、紀海音の署名ある序文が載せてある。よつて此の草子を紀海音の作とする人がある。然し序文の意では自作でない。假託の自序かも知れぬが、要するに作者とは斷じ難い。

余は彼の作品を読んで、其の感想を率直にいへば、深い親しみを覺える程になり得ないのである。其の譯は、(一)翻案物や改作物がかなり多い事。(二)構想作文や心境などの上に、著しい進歩變化を認められぬ事。(三)理智に偏して却つて素然たるものがある事。(四)餘りに詞を省略したり、詞遣も巧みでなかつたり、又はつまらない事を洒落て書く癖が往々ある爲に、讀者は其の文意を解するに苦しんだり、倦怠を催したりして、甚しく感興を殺ぐ。(五)悲喜苦樂の感情や様々の心の變化を描寫しても、それ等の底に流れる優秀な藝術の意義と價值とを見出し得ぬ。これ等の理由によつて、海音の作品は到底近松に及ぶものではないと信するのである。然るに彼が豊竹座附の作者となつて、竹本座附の作者近松と、長い間對抗し得たのは、作品の價值以外に於て、彼を支持した若太夫が、彼の文を活かして語る非凡な伎倆のあつた事や、また彼の構想が、人形淨瑠璃芝居の種々の要件に適してゐたからであらう。

彼の作つた曲名を列擧すれば次の通り。

けいせい 懐子 元祿十五年三月上演。座名未詳  
 未廣 十二段 同 十五年五月上演？  
 新百人一首 同 十五年十月上演？  
 新板兵庫の築島 同 十六年正月上演？  
 殺生 石 同 十六年二月上演？  
 坂上田村麿 同 十六年五月上演？  
 忠臣青砥刀 同 十六年七月上演？  
 枕久末松山 寶永五年三月上演

秦始皇帝太夫松 寶永五年七月上演  
 山折太夫戀慕姿 同 五年十月上演  
 富仁親王嵯峨錦 同 六年六月上演？  
 笠屋三勝二十五年忌 同 六年八月上演？  
 頼光新跡目論 同 七年正月上演？  
 本朝五翠殿 正徳元年正月上演？  
 おそめ 袂の白しほり 同 元年四月上演  
 平安城細石 同 二年正月上演

今宮丸 腰連 理松 正徳二年四月上演  
 心中 八幡太郎 東初梅 同 三年二月上演？  
 信田 森女 占 同 三年上演？  
 傾城 國性 爺 同 三年五月上演？  
 傾城 三度 笠 同 三年十月上演  
 鬼鹿毛 無佐志 鏡 同 三年十二月上演  
 曾我 姿富 士 同 四年七月上演  
 愛護 若嶋 箱 同 四年十月上演  
 八百屋 お七 同 四年上演？  
 傾城 思升 屋 同 五年五月上演  
 鎌倉 尼將 軍 享保元年二月上演  
 花山 院都 巽 同 元年七月上演  
 甲陽軍 鑑今様 姿 同 二年正月上演  
 なんば 橋心中 上演年代未詳

小野小町 都年玉 上演年代未詳  
 三井寺 開帳 同  
 鎌倉 三代 記 享保三年正月上演  
 義經 新高 館 同 四年正月上演  
 神功皇后 三韓 責 同 四年五月上演  
 業平 昔物語 同 四年十月上演  
 鎮西 八郎 唐土 船 同 五年正月上演  
 日本 傾城 始 同 五年九月上演  
 山柙 大夫 葭原 雀 同 五年九月上演  
 三輪 丹前 能 同 六年正月上演  
 吳越軍 談比翼 臺 同 六年九月上演  
 大友 王子 玉座 靴 同 七年正月上演  
 心中 二つ 腹帯 同 七年四月上演  
 東山 殿室 町台 戰 同 七年十一月上演  
 玄宗 皇帝 蓬萊 鶴 同 八年正月上演  
 傾城 無間 鐘 同 八年七月上演

實説

八百屋お七の實説は詳でない。よつて昔からの諸説を擧げて記して置く。

お七は江戸本郷追分邊(天和笑委集には森川宿とあり)の八百屋久兵衛(「我衣」には、お七の父は山瀬太郎の娘(「紙屑籠」に、寛文六年三月二十九日に生ると)で、頗る美人(「我衣」には、「一體肥り肉にて少し瘡のあともあり」といへり、色は白かりけれども)であつた。天和二年十二月二十八日未の刻(午後二時)に本郷駒込の大圓寺から出火し、西北の風に煽られて大火となつた。(「歴代炎上鑑」に、これをお七火事としてゐるのは誤であらう。)「武江年表」天和二年の

條に、「十二月二十八日未下刻駒込大圓寺より出火、本郷上野、池の端、夜遊御門、神田の邊、日本橋まで、淺草御藏、同御門、馬喰町邊、矢の御倉、兩國橋燒落、本所、深川に至る、夜に入て鎮火す」とある。お七の家もこの火災に類焼し、一家擧つて檀那寺(江都著聞集)「我衣」には圓乘寺とある。「天和笑委集」には正仙院とある。思ふに圓乘寺であらう)に寄寓する事となつた。

この時、この寺に美しい若衆の山田佐兵衛(「好色五人女」には小野川吉三郎とあり)が居て、お七と相思の仲となつた。其のうちに新築中のお七の家も出來上つたので、翌三年正月十五日に寺を引拂つて新宅へ戻つた。無智なお七は愛人に逢ふべき便もないので、

又も火事があつたら愛人に逢ふ種にもならうかと思ひ、三月上旬の或夜古綿反古などを丸め、近所の家の間に差込んで火をつけ

た。(「近世江都著聞集」には、近所のあぶれ者吉三郎がお七を放火の罪に陥らすやうにしたと見え、「我衣」にも、吉祥寺の門番吉兵衛の伴吉三郎といふ鰥突打が、お七を教唆して放火させたとある。「御當代記」には、「駒込のお七附火の事、此三月の事にて二十日時分よりさらきれしなり」)幸ひに早く人々に知れて、小火の中に消し止めたが、お七が放火したことが知れて捕へられ、市内を引廻された上、

三月二十九日に鈴ヶ森で火焙の刑に處せられた。(「武江年表」に、「天和三年三月二十九日駒込片町八百屋久兵衛の娘お七火刑に行はるとある。「天和笑委集」に、お七が市中を引廻された時の裝束を記して、「肌には羽二重、

白小袖、甲州郡内の基盤縞、淺葱の絲に縫ひたる定紋の三つ柏五つ所に、桃色の裏附けて、一尺五寸の大振袖上に重ね、横幅廣き紫帶、二重にきりりと引廻し、うしろにて結び止め、襟際少しおしくつるげ、たけなる黒髮局田とかやに結びあげ、銀裂輪の袴にしたる瑠璃の袴にて前髪をぞ思ひける、紅粉を以て面をいろどり」とある。「好色五人女」巻四にも、「其日の小袖郡内縞のきれい、迄も、世の人拾ひ求めてするく、の物語の種とある。お七と同日に鈴ヶ森で處刑された者の中に、放火犯の美少年喜三郎といふ者も居たといふ。お七の愛人を吉三郎とするは、この喜三郎を誤り傳へたものかともいふ)。行年十六歳(「好色五人女」巻四には十七歳とある。「紙屑籠」にある通り)。暮は小石川區指ヶ谷町南縁山圓乘寺の本堂の側にあつて、中央に「妙榮禪定尼 靈位」と刻し、其の右傍に「八百屋お七爲百十三回忌追善」、左傍に「天和三癸亥年

三月二十九日」と小さく刻んである。

八百屋お七の哀れな物語は、歌祭文や戯曲小説などに作られて世に弘まつた。本曲は上方で唄はれたお七の歌祭文や、西鶴作

の「五人女」巻四・戀草からけし八百屋物語に據つて、趣向を凝らしたものである。

## 影 響

本曲を修補したものに「潤色江戸紫」(爲永太郎兵衛等作。延享元年四月豊竹座に上演)がある。其の跋文に「昔の戀緋櫻の緋を紫に潤色し、其の模様を刪り、其の紋所の簡要を残し、古きを種とし新しく五巻に作り」と見えてゐる。更にこれを改作したものに「伊達娘戀緋鹿子」(菅草助等作。安永二年四月北堀江座に上演)がある。

歌舞伎では、「歌舞妓年代記寶永三年の條に、「今年正月大坂嵐三右衛門座にて、女形嵐喜代三・八百屋お七を勤むる、これお七の狂言の始なり」とある。それから後「追善彼岸櫻中將姫京雜」(寶永五年江戸中村座に上演。「歌舞妓年代記」に、「お七に嵐喜代三大當り」とある)、「富士の高根」(享保三年座に上演。「歌舞妓年代記」に、「三條勘太郎お七を勤むる、喜代三が紋丸に封じ文を付けたり、此「お七戀櫻反魂香」(寶曆元年江戸)、「其節又大入大繁昌す、依りて是より封じ文はお七が紋所となりて、三ヶ津ともに是を付ける」とある)、「吉三戀櫻反魂香」(中村座に上演)、「其往昔戀江戸染」(三月江戸森田座に上演)などがある。又「松竹梅雪」(河竹默阿彌作。安政三年十一月江戸市村座に上演)には、「伊達娘戀緋鹿子」(淨瑠璃)にある、夜半に火の見櫓の半鐘を撞いて、市中の門を開かせようとするお七人形振の所作が取入れてある。

可憐なお七は戀の道に迷ひ、我が家に火を放つて火焙に處せられ、悲惨な最期を遂げたものとして、小説に作られ、歌祭文・説經に誦はれ、戯曲の好材料にもなり、名匠の筆によつて藝術化された。また路傍の見世物・硯機關にも仕組まれて、其の言ひ立ての哀婉な情調は大眾の感興をそそり、其の哀れな物語は津々浦々までも知れ渡つた。嘗ては懐懐の氣に満ちた鈴ヶ森も、今は刑場跡の名ばかり残り、自動車のサイレンけたたましく、絃歌鄭聲さへも聞えて、人をして今昔の感に堪へざらしめるものがある。

## 上 卷 (吉祥寺)

梗概

吉三郎 (安森源次兵衛の子、吉祥寺の住持の弟子)

お七 (八百屋久兵衛の娘)

お杉 (久兵衛の女中)

辨長 (吉祥寺の小僧、十二歳)

萬屋武兵衛 (久兵衛の町内組中の者、お七を戀慕す)

太左衛門 (武兵衛の友人)

内 (安森源次兵衛の家來)

吉祥寺の住持 (四十餘歳)

八百屋久兵衛夫婦 (お七の親)

安森源次兵衛はさる大名に仕へて、千石取りの武士であつたが、若殿の難儀を我が身に引受け、無實の汚名を被せられて自殺しようとした。其の爲に一子吉三郎が浪人となるを不便に思ひ、僧にしようとして江戸本郷駒込の日蓮宗の吉祥寺に送つた。いつの間にか吉三郎は、この寺の檀徒本郷の八百屋久兵衛の娘お七と相思の仲となる。お七は愛人に逢ひたさに女中お杉を連れ、親に後れて寺に詣でる。お杉はお七の心を察して吉三郎との戀を取持つた。お七は吉三郎が僧となるを思ひ止らせて、夫婦約束をしようとして吉三郎に起請文を與へる。吉三郎も亦誓詞を書いてお七に與へようとして、料紙視箱を取出す。新發意の辨長は常香盤に香を盛りながら之を見て、「これ吉三様何をなさる。上人様が曼陀羅を書かれる筆で、滅多な事を書いては物體ない、穢らはしい」と咎めた。お杉は戀の邪魔する辨長を嫌し戯れながら、色々怖ろしい怪談を語り、辨長が怖ろしがるを引つ抱へ、其の顔に小袖を打掛け、抱帯を巻附けて目を掩ひ、その間に吉三郎に起請文を書かせた。そしてお七・吉三郎に心添へして、飛石傳ひに圍の中に遁れさせて、わりない縁を結ばせ、自らは方丈に逃げ去つた。辨長は一人残されて、「吉三様・お七様・お杉」と、呼べども答がないので面縛を取除け、あたりを見廻して、吉三郎の脱ける衣の袂からお七の起請文を奪ひ、「一杯食はされた振して其の裏をかき、これを取つてやつた。よい氣味だ」と笑ふ。かねてお七に戀想してゐる萬屋武兵衛は、友人の太左衛門と共に、前からこの様子を覗つて居て、つか／＼と入り來り、辨長を嫌してお七の起請文を奪つた。

源次兵衛の家來十内は深編笠を被り、吉三郎を尋ねて吉祥寺に來り、住持に會つて吉三郎が學問を勵める由を聞き、厚く禮を述べて悦ぶ。住持は銀きながら、「今日にも吉三郎を出家致させよう」といふ。吉三郎は之を聞いて、お七との情交を續けたいば

かりに、出家せぬが孝行であるなどと、無茶な理窟を述べて出家を嫌つた。十内乃ち武士の道を説き、源次兵衛の志を語つて吉三郎を諭したが、戀に迷へる吉三郎は、黙然として返答せぬ。折から、奥に居た八百屋久兵衛親子連れ、續いて武兵衛・太左衛門が現はれる。久兵衛は住持に挨拶して歸らうとする。胸に一物ある武兵衛・太左衛門は時こそよけれと思ひ、お七・吉三郎の密通を發き、源次兵衛をも痛罵し、又お七の起請文を取出して讀んだ。久兵衛夫婦は我が娘の淫奔を聞いて驚き、且つ怒つて吉三郎を罵る。情深い住持は、淫奔を身に引受けて吉三郎を庇ふ。武兵衛・太左衛門は住持にくつてかかり、「其方がまこと破戒僧であるなら、卯酒も飲むであらう」とて卵を取出し、「さあ卯酒を飲まつしやれ」といふ。住持は吉三郎を救ふ爲には、これを飲んで殺生戒を破るのも敢て辭せぬと、涙を浮べて悲壯な決心をする。吉三郎は始終黙然として之を見てゐる。十内は堪り兼ねて、吉三郎の腐り根性を罵り、懷中から源次兵衛の骨桶を取出し、懇々と源次兵衛の遺志を述べ、強意見を加へて泣く。然るに吉三郎はお七と顔を見合はせて、なほも口を箝して語らぬ。十内大いに怒り、吉三郎を刺殺して自刃しようとしたが、住持は十内を叱つて思ひ止まらせる。武兵衛・太左衛門は、「事がむづかしくなつた」とて、こつそりと歸らうとする。十内「こら待て」と聲を掛け、武兵衛・太左衛門を捕へて、毆打し投飛ばし踏附け蹴散す。久兵衛夫婦も氣味悪く、泣くお七を引立てて歸る。

## 評

お七が吉三郎と密通し、又お七が辨長を怖ろしがらす場は、西鶴の「五人女」巻四、「虫出しの神鳴もふんどしかきたる君様」の條の醜案である。即ちお七が暗かりに吉三郎を尋ね行く時に、小坊主が常香盤に香をついで立去るに出合ひ、髪を亂して之を脅かし、そして小坊主の望む錢八十と、松葉屋のかるたと、淺草の米饅頭五つとを與へる事を約して、小坊主を寢間に入らせ、其の後に吉三郎と密會するといふ、其の文によつて技巧を凝らしたものである。又十内が武士道を説いて吉三郎を諭す條は、餘りに技巧に過ぎて不自然な嫌ひがある。がこれは後に吉三郎が切腹する伏線としたものであらう。吉祥寺の住持が、弟子の吉三郎を庇ふ條は、さすがに難行を積んだ善知識たるを思はせる。要するに本卷は、各人の心々をよく寫した洗煉の筆である。



上 卷

○木の端 役に立たぬ義。僧侶をさしていふ。「枕草紙」に、おもはん子を法師になしたらんこそはいと心苦しけれ、さるはいと頼もしきわざを、たゞ木の端なむのやうに思ひたらんこそいほしけれ。この文意は、浮世を捨てた僧侶の事を木の端など、誰が片意地な隨筆にかく書いたのであらうと、清少納言の「枕草紙」にあるをさしてうたう。

○煩惱菩提所 「煩惱」とは一切衆生を迷はし惱ますものをいひ、「菩提」とは不生不滅な真如の理を證得する聖智をいふ。煩惱と菩提とは正反對なるが如けれども、本體からいへば毫も區別なく、不二體である。よつて煩惱即菩提といふ。この文はこの佛教の語を用ひて菩提寺即ち且那寺の意にいひかく。

○唐戸 觀音開きの扉に横に棧を入れ、上部に猪目の彫刻などをしたるもの。  
○舞良戸 細い棧が横に密にある戸。  
○とりばうき 鳥の羽で作つた袴。

○塵 塵埃と塵俗の世をいひかく。塵は鳥等の雜語。  
○法性 諸法の體性の義。真理の意。真如。  
○小姓 貴人の側仕へて膝許の用を辨じる少年。  
○愛き事 戀に心を苦しめることと、茶臼を挽く愛き仕事とをいひかく。  
○口切 茶壺の口を開け、新茶の封切りをする事。初禮の意をいひかく。  
○花柄 袖の窠の美稱で、椿を花柄といふの類。  
○松茸の窄 覽員の意をさかした。

木の端と誰が片意地な筆すさみ、それは浮世を捨坊主、これは煩惱、菩提所の、寺は華麗の、大書院、唐戸・舞良戸・違棚、掃きちぎつたる鳥帚塵に交れど法性の、水は濁らぬ灌川の戀に小姓の吉三郎、遊びがてらに挽く茶臼、眠たからうと

人目には、見へて寝もせぬ憂き事に、花の姿も萎れ行、君を濃茶に口切の、主は誰様お七様立つ名はげにも本郷の八百屋の花袖松茸の窄も何れ初物の、縁は可笑や假初の、過し火難に此寺へ、親子主從厄介の内のもやゝ氣も附かず、普請も出来て鴛鴦の雌雄つれなき水離れ、立ても居てもあらねば、せめてお顔を拜み

おもやゝ くだつき。紛紜。こそくな情事をいひかく。  
○普請 工事。この語宋音で、もも佛家で普く同志に請うて共に事を爲すをいひ、轉じて工事をいふ。  
○つれなき 普僧超えて知らぬ振るをいふ。そして「つがひ」と同じ首音をかきた所調頭韻法。

○水離れ 親の手許を離れて自由行動するをいひ、鴛鴦の縁語によつた。そして「立つ」を鴛鴦の飛立つにいひかけ、お七が吉三郎から離れてゐるので、立つても居てもゐられぬの意。近松作「卯月紅葉上巻」に「堅地の父の親の手を水離れせぬお龜とは、一人娘の命を萬代記か名なるべし」。

○玉鉾の 玉鉾の身さいふを、みち(道)にいひかけた枕詞。そして玉鉾に給ふをいひかけず。

○搔取 衣の裾又は袷先をかかゆること。

○體やつて 癖儀をこのへて。

○おぢや おぢやれ。おいでよ。

○ねらがひ 「ねがひ(願)」に「ら」の添はつた片言であらう。

○あたふた あわてて心の動揺するさま。

○あかりの戀 あからめの戀で、傍觀して慕ふ心の意。

○しほ 機會。「榛潤菜」に「物のほごよき時節をいしほいふも、潮の指引より出たるなるべし」。

○てちだをかへ 「手傳てつた」はうかしの説であらう。

○道も忘れず 長らく來ぬ故の皮肉。

○味な うまい。おつな。「味な趣向」とは、戀の趣向の意にいうた。

○堺町・木挽町 堺町・葦屋町・木挽町は往時江戸の劇場の所在地であつた。(見索引)

○抹香 しきみの葉又は皮を粉末とした香。僧侶じみたを抹香臭いといふ。

○留袖 香を留めてゐる袖。

○氣をもたす 相手を誦して一種の氣持ちを起させる。

○誓文腐れ 傷るに於てはこの身腐れと、神かけて誓ふ文言の義であつて、自誓の詞。

○心に立てて 心に誓を立てて。

にと、親の跡追う寺參り、釋迦も見ゆるし玉鉾の、道の搔取押下し、襟繕ふて體

やつて、座敷へ出れば君が顔、見るよりはつと氣上りし、「ノウ杉や、もふおじや

何と去ぬまいか」と、髪を弄いつ手を撫でつ、もちくするももどかしく、「ハテ

まあ初心な何ぞいの、親御は後生ねらいにお前は小姓ねらいに、あたふたと

取急ぎこんな尊い首尾へ來て、あかりの戀が初でも何が恥かしござんす」と、背

中をついと押遣られ倒れ掛かるをしほにして、とんと後へ凭れ寄り、「てちだをか

へ」と手を取れば、吉三郎振返り、「ハアハお七様お久しや、道も忘れず今日の御參

詣は奇特なり、然し御親父久兵衛様・お袋様は二時も、先から參つてござるのに

跡へ下つて何ぞ又、味な趣向があつたもの、聞ば毎日堺町・木挽町への御遊山

に、歌舞伎若衆の美しい姿でうまい狂言を、御覽じた目で私などが抹香ばかり留

袖に、飽きの來たのは御尤戀のいろはを教へても、手が悪ければお師匠を替へて

嫁入遊ばすげな、目出度い事じや」と氣を持たす、お七はさすが正直の顔を赤め

て涙ぐみ、「誓文くされ何日か芝居へ足も向けませす、心に立てて牡猫さへ膝に

抱いたる事もなし、此方様こそは方々から女子の弟子が附いたやら、ちつとの内

○固め 女天の固め。

○起請 事を發起して神佛の照覽を請願すること。こゝは其の起請文をさす。

○新發意 發心して佛道に入つて、日まだ遠き者をいふ。

○常香 福えず佛前に供へる香。常香を焚くに用ひる香爐を常香臺といふ。こゝは臺中の灰に瀝氏香みだいに香を盛つてゐたのである。

○曼陀羅 梵語 Mandala。輪圓具足の義。諸佛諸尊を描いた畫圖などをいひ、又は單に名號を書いたものをもいふ。こゝは別題目のある日蓮宗の曼陀羅をさす。

○淨土の一枚起請 淨土宗の一枚起請文をいふ。建曆二年正月二十三日に淨土宗の開祖源空が一枚起請文を書き、極樂往生するには念佛を唱へるに限ると誓はれた文である。そして淨土宗では法然上人の教として最も尊崇する物である。

○宗旨變へる 日蓮宗から淨土宗に宗旨を變へる。

○あんだら 「横(あ)の(ま)ろし」の釋説。あの愚痴。近松作「女殺油地獄」に「あんだらめには拳一ツ當てずはたえさせ、萬事に遠慮が將身の仇」。こゝの文は、曼陀羅の地口の洒落。

○五百生 五百世ともいひ、時の長きをいふ套語。「太平記卷十一」に「念五百生、賢念無量劫」。

に大人びて小面の憎い此口が私は因果で可愛いもの、何處へ嫁入をするものぞお

前はやがて坊様に、ならしやんとすとの取沙汰が氣懸りでならぬ故、互の固めせふ

爲に、コレ起請を」と差出す、吉三郎はやがて載いて、「忝い、とやかく言

たは皆偽り誠を見する誓詞をば、只今致て進せふ」と棚より料紙・硯箱・筆押取て

書所へ、新發意常香盛さして、後の方に立成き、「コレ吉三様何さしやる、上人様

の曼陀羅をあそばす筆で物體無い、穢らはしい」と咎められ、はつと下に差置て、

「ハア辨長、貴方は先から其處に居て様子は何も聞きやらぬか、お七様のおつし

やるは、曼陀羅が欲しけれどお師匠様へは憚りな、身共にとのお望故書こふとし

たが何とした」、「エ、如何にもそんな事そふなが、お七様から遣らしやつたは、

淨土の一枚起請とやら、有難そふに戴いて此方は宗旨變へる氣か、曼陀羅書くと

おしやれどもそりやあんだら」と笑ひける、お七はやがて手を取つて「何時見て

も何時見ても、可愛らしい坊様じや巾著でも紙入でも、欲しくは縫ひて進じよぞ

ヤ、ちよつと見た事聞た事言はぬ物じや」と賺せども、中々頭打叩き、「愚僧今年

十二歳出家の道を相守つて女の手から物取れば、五百生が其間手の無い者に生れ

○獄卒 地獄にて亡者を責責する鬼。

○琉球芋 さつまいも。もみ琉球から渡來したさいふによつてこの名がある。

○こまつけられず こまつけ(小懐)られずの配か。

○取附く蟲 取附いて害をなす人を蟲に喩へていふ。「毛吹草」に「取附虫の如し」。

○花の嵐 好事に故障多い場合にいふ語。

○目に入る様な 日の中へ入れても痛くないほど可愛い。若長の機嫌を取つてかといふ。

○出家・侍・佛の使者 農工商の人が相手に取り難きものを並べていひ、そして「佛の使者」に新發意をさせた。

○ねつな事 熱な事の義で、ねづけた事の意でからう。「倭訓栞」に「ねづける、ねぢれるなぞ皆湯戻の意也、熱より出たる詞にや」とある。

○幽靈を浮める 迷界に沈淪して夢裏に迷へる亡魂を浮めて極樂往生さす。

○八官町 今の京橋區銀座西八丁目電話交換局のあるあたりの町名。町内に比丘尼の淫をひきま宿があつた。そして八官町に「法華經」の八巻をいひかく。

○びくにん びくに(比丘尼)に擬せ「ん」の添はつた語。比丘尼の姿をした賣笑婦。往時は賣笑婦の比丘尼が上方にも居た。

○ちとくわん 少勤であつて、少勤進の略。勸進の爲に少しの賣捨を乞ふ意で、比丘尼のいふ詞。これに「ち」を添をいひかけた。(見索引)

ます、又嘔吐けば獄卒が鐵の鉄で舌を抜く、それでは日比好物な琉球芋が食はれぬ」と、こまつけられず立去らず、取附蟲の辨長や、花の嵐と持餘す、杉は捕まへ出来ました、目に入る様なお前でも出家・侍・佛の使者、位の高いお人じやが、それでも爰へたつた今幽靈が出ましたら、怖ろしがつて泣かしやるがの、「ハ

アねつな事をば言やるのふ、其幽靈を浮めてやる、胸に納めた法華經の、八官町のびくにんのちとくはん桶の詰つたが、迷ひとなつて幽靈が其處な丸太の間から、出たを深達罪福相浮めてやつた」と意氣過ぎた、習はぬ經の談義口「悉皆富樓那の辨長様、是から私が咄そふ」と膝に抱寄せ「聞かしやんせ、此方の隣に分限者の作り倒れがあつたげな、男は去年の正月に初の子生んで死なれたげな、跡で後家御が騙られて傾城狂ひをしられたげな、揚錢の魅入にて殺鬼といふ鬼になり、慾に眼が光るやら身體に尾が見ゆるやら、額に江口・倉橋の大根程な角生へたを、くき桶に入れ其家のはしりの側に埋んだげな、其執心で夜々は屋鳴り震動雷電し、天井板がむちくく、梯の子がぐはたくく、四方の壁がどろくく、」  
「モウ此咄措いてたも、どふやら面白なさそふな、」ハテ後を聞かしやんせ、又膳棚

○丸太 色を賣る比丘尼をいふ。僧を木の端をいふより、比丘尼をも丸太木の意にこりなした稱である。この文は丸太木をいひかけた。

○深達罪福相 「法華經」提婆品に「深達罪福相、輪照於十方」とある。十界の作業業徳の根源に深く達する意。

○談義口 談義の口上。談義とは對談法義といふこと、佛法を談じて正道を示すをいふ。佛教の法話。説教。

○富樓那 釋尊十六弟子中の一人で、辯舌巧みに説法の名人として、衆弟子中第一の尊者であつた。

○作り倒れ 不作の爲に財産が倒れること。「新永代藏」卷一に、「豎國の作りたふれの百姓を招き」。

○傾城狂ひ 遊女の色香に迷うて夢中なること。

○揚鏡 遊女の揚代。妓女を呼寄せて侍らした費用。

○殺鬼 一切萬物は生滅變遷して常住でない。この無常の理を喰へて殺鬼といふ。「摩訶止観」七に、「無常殺鬼不擇三寶賢」。殺鬼に節季をいひかく。

○身體に尾が見える 財産の無きを、有るやうに見せてゐる、其の正體が見える。「身體は正しくは身代であるが、古くから身體と書いてゐる。「尾が見える」は、狐狸に譬へて本性正體が見えるをいふ。

○江口・倉橋 共に遊女の名で、前文の「傾城狂ひをせられたゆゑ」に應じたものであらう。そして「寶物集」下巻に「女人地獄使、能斷佛種子、外面

がぐはら〜、庭の薄がざは〜、明障子がぼうつと燃へ、其中から幽靈が白佛程化粧ぶての、お齒黒は烏羽色髪打捌き逆様に、屏風の陰によつとりと、顔差出してけら〜、ハット笑ふたげな、家内の者が一時にワ、〜ワット目を廻せば、小坊主はうろたへて彼方らへ向けば向ふから、又其顔が出る此方らへ寄れば後から、毛の生へた手で投まはす仰向けば二階から、俯けば簀の子から」。「是はならぬ」と逃廻り、吉三が袖に顔差入法蓮華經も本道も、附ふ薬の無い首尾を杉が機轉の手療治に、引ん抱へ来て風呂敷の小袖を取つて辨長が、顔に起請を早々と、先よい事を書院先硯を取つて樽縁より濡縁

似善隣 内心知(夜叉)とあるから、それらによつて「大根程な角」ミツづけたのであらう。

○くき桶 蓋桶であつて、野菜の蓋などを隠すなごにして置く桶。漬物桶。「日本水代藏」卷一、舟人馬かた隠屋の庭の條に、「鹽鑄賣の聲をも聞かき、蓋桶の用意、焼火をたのしみ」。

○はしり 糞所のながしをいふ。物を洗つた水を走らし棄てるよりの稱。

○震動雷電 轉じて「したらでん」といひ、ごよめき喉がしうこ。

○白佛 胡粉(白粉)を塗つた佛像。

○投まはす 「擲(な)で」まはすの誤であらう。

○本道 漢方醫にて内科をいふ。「太平記」卷三十三、將軍御逝去の條に、「本道外科の醫師歌を盡して参り集り」。

○附けう薬の無い 醫する方法がない。語に「馬鹿に附ける薬がない」といふ。

○風呂敷の小袖 風呂敷包の中の小袖。

○書院 書齋。「風」しうにひかく。

○樽縁 縁がまちと平行に板を長く張つた縁側。

○濡縁 雨戸の敷居の外に作れる縁側をいひ、雨に濡れるに任せるよりの稱。これに情交の縁をいひかけた。濡れまは情事をいふ。樽縁・濡縁は同じ脚韻によつた即ち脚韻法。

○お題目 南無妙法蓮華經をいひ、經の題目を唱へるによつてかくいふ。

○如是本末 經典の本末。佛教經典の方式として、始めに必らず「如是我聞」と置く。これは經典結集の時、結集者が自己の信聞した所かくの如しと、表白するの意である。そして是の如き戀の本末の意をいひかく。

○究竟 至極の義。この語佛典中に見え、究は理の極をいひ、落は事の極をいふ。

○方便品 方便即ちたての意に方便品をいひかく。方便品は「法華經」二十八品中の第二の品名。

○抱帯 細く紐くつけた婦女の腰帶である。しじき帯。着物をからけて纏ふにより、手で抱へて居る様な形になるから抱帯といふ。貞享の初年頃は、その帯の端を前でも又は後でも結んだが、追々前でのみ結ぶやうになつた。(見索引)。この文は「抱へ」に「抱帯」をいひかけた。

○めかり 「めりかり」の略であらう。「めり」は被で背の下りをいひ、「かり」は加で背の上りをいふ。以て背の上下の調子をいひ、轉じてばあひ、氣轉、氣兼ねの意にいふ。

○方丈 寺院の長老住持の居所をいふ。寺院の座敷をいうたのである。方丈の語は、も三無障居士が方丈の室に居たり起る。

○目ん無い千鳥 「めないちどり(目無千鳥)が番便によつて撥音「ん」の添加した語。小兒宰相集り、其の中の一人目かくしをなし、他の者どもを捕へようとして追ふ遊戯である。千鳥は群れて遊ぶも

有こそ嬉けれ、互に向ふ顔と顔あちらに抱けば此方にも、怖ろしがりて抱附い  
てお題目よりお經より、如是本末や究竟の子供を騙す方便品、膝の間より坊主首  
によつと出して「見た〜」己を見附た」と駈寄るを杉も續いて走り寄り、其  
處を彼の幽靈が後より引つ摑み、なふ恨めしや其方故に、多くの屋内が世話をや  
く、小意氣過たる小坊主めと、まつ斯のやうに抱」帯くる〜と目を巻きて、  
執念き聲で「やい其處な、二人の者はうつかりと何うろたへて立てゐる、其方ら  
ではない此方らへじや、ハアテ彼方らへめかりの無い帶解く事も時による、つい  
ちよこ〜と寝るもの」と、氣を附られて領いて、飛石傳いやう〜と圍の内へ  
入れば、さあ爲濟した幽靈も最早冥途へ歸る」とて、搔消す様に方丈へ逃て、  
形はなかりけり、辨長一人うろ〜と、杉こりや何とする事ぞ、目ん無いちどり  
か合點じや」と、座敷一間を舞い歩き「吉三殿お七様、杉々々」と呼ばへども、  
返事なければ鉢巻を、そつと外して「こりやどぶじや」と、あたりを見廻し打領  
き起請を出して押戴き「一杯はめたと思やろが其裏くはせ此方らには吉三の袖の  
内に有これしてやつた好い氣味じや」と、打笑ふたる後には、萬屋武兵衛・太左

のなるより較べてかくいふ。

○つがもない 「つながりもない」の義。縁もない。さんでもない。わけもない。

○これつ 呂律が懸幕の音に引かれて訛つたのである。物言ふ調子をいひ、以て口上・文句の意にいふ。

○木佛 木を彫刻して造つた佛像。きほまじけ。きぶつ。

○布袋屋歌留多一面 布袋屋は當時有名な歌留多店である。一面は一組である。骨牌一組を一枚の紙に刷るによつて骨牌一面といふ。「俳諧引草集」(貞享元年刊)に「今時のかきた屋、布袋屋松葉屋、笹屋」「世間御算用」(元禄五年刊)卷三に、「布袋屋の骨牌一面買つて、道ありきありき八九さうに心懸入るもの。」

○よみ打つ かるたの勝負をする。「讀みまじは、かるたの遊戯に己が得た札の數値を數へること。打つ」とは、かるたの戯をするをいふ。「薩州府志」七、賀留多の條に、「其玩之法、其始三人或五人圍坐、其内一人左手取持賀留多、以其裏面上下混雜、其爲戲調ヲ打賀留多、然後人々所得之札數一三二次算、早拂盡所持之札、是爲一勝是謂讀、俗俗毎事算之謂讀。」

○釋迦に契りを結ぶの神 うんすんからた四十八枚の内、音の札の内第十の札一枚に、法師の形を畫いてあつた。之を釋迦の繪札といふ。この文はこれをいひかけて、お七が釋迦を縁結びの神として、吉三郎と契りの意にいうた。  
○にくずし にくくずし(煮崩)であらう。煮て崩

衛門先より様子を聞濟し、新發意爰に何してじや、一エ、お二人様お参りか、久

兵衛様も先から客殿にござります、お出」と云て駈け行を、「ア、是辨長殿、此

方が只今戴いた文を身共に下されい」、「ハテつがもない事ばかり、忝も是は

な、お七様と吉三郎戀慕れ、つの起請とやら、お前が貰ふて何さしやる」「サア

其お七と吉三めが起請じや故に貰ひたい、其代には常々に欲しい」と言はれた

る木佛の大黒と布袋屋歌留多一面じやが、何と」と背中を叩かれて「こりや談合

が面白いが、騙くはすのじやござらぬかや、「ハテ何の嘘をば吐くものぞ即太

左が請合じや、「ム、歴々の證據人そんなら遣ろ」と差出せば、武兵衛悦び請取

て「是さへあれば此方の、戀は叶ふた手に入た」と兩人つぶやき入にけり、辨長

は只一筋に「武兵衛様 必や、明日ともいはず晩からは六介が部屋へ行て、二文

四文のよみ打て」釋迦に契りを結ぶの神、お七が戀のにくずしと知らぬ、事こそ

悲しけれ、主従の縁はさすが深編笠用ありげなる侍の、玄關に佇みて「頼ませふ」

と言入る、折節住持は方丈へ吉三伴ひ出給ひ、「何人なるぞ用あらば此方へ」と有

すこのの義、轉じて、めちやくに崩すこの意にいふ。

○深編笠 「深い」に「深編笠」をいひかく。

○ヤア十内殿：奇特に存ずる 住持の詞。

○殘心 残念。名殘惜しい心。「近頃河原の差引」中之巻、彌川の段に「おしゆんが方に殘心氣は離れてあるわい」とある。

○世界 現世。

○一合 いささか。後に「私欲の科を身に被りてあるから、これも一合ではなくて、やはり一合であらう。

○武士の虚名を受けたる事 武士が主君の爲に無實の汚名を受けた事。

○染衣 風染の衣。

○胸に手を置く 思案する。

けるに、ハツト答へて編笠を取つて彼處に入れば、ヤア十内殿お久しい、先申さふ御主人には不慮成事の御浪人、殘心推量 仕 た吉三は親子の中なれば嘸歎かふと存たに、さすがは學問精に入れ出家に染まる程あつて、世界は無常と諦めて頓著も致さぬ段さりとはい奇特に存る」と執成しあれば十内は、満悦至極の御詞それと申も上人の、日比お示し有いはれ就いては主人源次兵衛、浪人せしは何故とお耳へ入しは知らねども、自分に於て一合も非道の沙汰は致さねども、若殿の御難儀を救い申さん爲ばかり、私欲の科を身に被り武士の虚名を受たる事、更々悔候らはす、それに附ても吉三郎出家の願ひを只管に、貴僧様へ申 上剃髮染衣の姿をば、篤と見届立歸れと、拙者を差越候」と懇懃に相述ぶる、上人暫し領いて、「苦勞の中にもそれ程に、子は大切な者じやよのふ成程く今日にも、出家致させ申さふ」と悦ばしげなる返答を、胸に手を置く吉三郎、とやかく思ひめぐらし、真中へすつと出、珍しや十内扱 某が出家の事御師匠仰有通り、心に待かね居つたるが今其方が咄を聞、忽心底 翻り二度武士になる思案、先一通り承はれ、父源次兵衛若殿への、忠義に浪人致せしを若殿御満足に思召、御身持



○遁世 佛道を求める爲に、隱遁して社會の俗務に心を傾きまされぬことをいふ。出家。

○差別はない 武士はいづれも同じ精神であつて、君に對する精神に差別はない。

○親殿御抱へなされまい 親殿様（若君の親、大殿をさす）がお前を御召抱へなされぬであらう。

○發心 發菩提心の略。佛道に人る心をおこすこと。

直れば浪人せし甲斐あらん、然れども此趣大殿御存なき時は、親たる人徒奉公をした道理、某國へ立歸り隠れし忠義を顯す事、今日遁世致すより拔群の孝行と、詞飾るも好色の嘘に馴れたる證なれ、十内涙を袖に受け「多くの書物を見廣げて、深き道理を思召す御所存感じ入つたるが、武士の作法は外の事、主の善悪顧みず討死するも世の習、そこは差別はない所、お前が奉公お望でも不届者の性として親殿御抱へなされまい、申開きもならぬ筈、すご〜歸り給ふのは恥に上塗する同然、能く〜思し直されよ」と理を正せども「イヤ〜」、身共が勘當受けたのは大殿も御存有、さあれば親とは他人なり、其他人の某が奉公望が誤りか、何の遠慮有べき」と言はせも果てず、是吉三様、勘當を言立に御奉公ある此方なら、孝行顔もいらぬもの、ア、どふやらお前の御胸中紛らはしうて吞込まれぬ、是も非も入らぬ發心をさあ、成さるゝか成されぬか返答次第拙者めが、分別有」とにじり寄る、上人は聲を上「ア、氣が短い十内殿、武道の仕儀は其許に如何様とも捌かれい、法師の道は此方へ預置かる、筈の事、數ならねども師と頼む愚僧が指圖致す儀を、吉三も否とは申まい世話を焼かずと緩りつと、心鎮めて語

○非時 佛の戒に、午時を過ぎれば食はぬを法としてゐるので、午後には食を取るを非時といふ。福林集巻五に、「老學菴筆記云、佛戒に比丘非時食、蓋其法過午則不食也、而如付招客草食、謂之非時」。

○能うござるわい 急いでお歸りにならなくても、よろこぶるわい。

○大それた事 「大逆れた事」であつて、甚だしく思はぬ方へそれた事の義。大いに常軌をはずれた事。餘蘊もない事。「俚言集賢」に、「だいそれた」(毛吹草大藤はそれぬものなるを、それがそれたるは是あるまじき事の有りたるなり、故に嘘へいふと云へり)。

○縛首を討つ 麻繩で罪人を後手に縛り、首を前へ出させて斬るをいふ。

らしやれ、こりや〜辨長茶持て来い、非時もこしらへ煙草盆酒よ銚子よ」  
さんぐの、中に立たる御師匠の心遣ぞ殊勝なる、然る折節方丈より八百屋久  
兵衛親子連れ、續いて武兵衛太左衛門・住持の前に會釋して、「お暇申」と立出  
る、「エ、こりや各お歸りか、最前より此處に居て御挨拶もせなんだ故、武兵衛殿  
や太左殿は定めて酒が足りませんまい、お客も心安い仁能ふござるはい遊ばしやれ、  
平に〜」と止むれば兩人は立止り、「久兵衛殿聞かしやつたか、御遠慮のないお  
方と有然らば序に今の事、お寺へお咄致ませふ」、「ハテ武兵衛殿それはまあ今  
日に限らぬ事、噂や娘も連れられたれば暮れぬ内に去にたいが、ござれ」といふも聞  
かぬ顔是非なく共に立戻る、兩人は上人の膝許に畏り、「御酒は望に候はぬが急  
にお知らせ申たき、曰くは是なる吉三郎、親御は名有武士とやら、承れば大そ  
れた事爲出して、此比追放せられたとも、縛首を討れたとも口々の取沙汰故、親  
の子なれば如何様の儀がござらふも知れませぬ、片時も早く暇をば遣はされたら  
好からふと憚ながら存ます」、「ハア心遣は忝し先だつて其事は愚僧も聞て  
居まするが、世間の沙汰とは裏表様子は分ていはれぬ儀、苦勞に思ふて下さるな、



○すつばのかは 整人ぬすびをいふ。すつばは養子すはやしの義であらう。敵地に入る忍び者の稱であつたが轉じて、騙者、盜賊の意にいろ。「すつばのかは」の「かはは、」てんぼのかは」「ちんごのかは」「なごの」「かは」と同じく、流はつた語である。

○若衆 往時男子十三歳になれば、前髪を立てて髪を結うた。之を若衆鬘といひ、若衆鬘を結へる者を若衆と稱した。こゝは吉三郎をさす。

○はれ。いたいけな やれ。きつうかはゆけな。「はれ」は威嚇詞。やれ。「いたいけ」は傷い氣の義。傷はしう思はれる程かはゆけ。甚だかはゆけ。愛しむ意の深きをいふ。

○しどけなう 靜かに落着きの心が無う。しまりなう。

○わかるらじ 「わからじ」の誤か。ここの文は、吉三お七のいたづらを、上人が我が身に引受けようとして衣を濡す源こそ、兩人を思ふ慈悲の涙であるが、吉三お七にはわからないのであらう。袖に顔をおしあてて泣いてはかりるからはの意。

○馬を驚になす 黒白を顛倒する義であつて、非を理にいふ意の略。

○おぢやらぬ ぢぢらぬ。

○吉祥寺 東京市本郷區駒込吉祥寺町にあつて、曹洞宗の寺院である。この寺は八百屋お七は何の關係もなく、日蓮宗の寺院でもない。作者はこの寺を假りに用ひたのである。

を叩き身を顛はし、やい其處な淫奔者、いつの間にもあ此様な大膽な儀を爲出し、大勢の真中で親に面恥か、せ居る、すつばのかはな若衆が、此久兵衛が僅なる家一軒を見込みにて、仕掛けた戀に乗せられたな、大だはけめ盗人め」と彼方を睨み此方をば、引摺り寄せて散々に打たる、杖の下よりも、お七は吉三を打見遣り、吉三は爰に居ながらに消へも失せたき心なり、住持は暫し默然と涙を隠し居られしが、やゝあつて「是御夫婦、全くお七に科もなく、吉三が淫奔したでもなし科人は此坊主、お七が此處に居られし節、はれいたいけな發明な、娘の子じやと思ふから戯れ事を二三度も申した事の候が、サア女はどこやら愚かにて眞誠かと某へ送らふとがな思ふたを、しどけなふして拾はれて、無き名負ふたる不便や」と、衣に落つる涙こそ二人が、袖にわかるらじ、武兵衛は急いで大胡坐「是お寺様、御最眞があんまり過てむつとする、烏を驚になされうが起請の文字は剝がされまい、これ御覽せ」と投出す、「いや見る迄もないお手前が、最前讀んだ文言に、其方様に御出家を止めさすからとは無かつたか、吉三は出家じやおぢやらぬぞ、宛名に書し吉様は愚僧勿論吉祥寺、何と紛いはあるまい」と、眞顔作つた諍ひに、

配するに至つた。

○如何にも いかにも其の通り。

○佛祖 佛と祖師、即ち釋尊と日蓮聖人。

○邪淫は思案の外 邪淫とは好色をいふ。詠に「色は思案の外にもいふ。」

○殺生戒 五戒殺生・偷盜・邪淫・妄語・飲酒の一。ここにいへる「邪淫」も五戒の一である。

○垢は脱けられまい 汚名はすすがれまい。

○まで 語尾に附けて、念を推し意を強めるに用ひ語。近松作「卯月の調色」中之卷に、「鍋蓋あつても女房が無い、事の缺けぬは不思議ぢやまで。」

○おんでもない 當然である。勿論である。

○おんに、「おん」は「思がまし」「思がらす」などいふ思であつて、「おんでもない」は即ち「思でも無い」の義である。この詞は狂言「笠の下」などにも見えてゐる。

○げに ほんに。思ひ出した時にいふ副詞。

○鶴の秤に身を代へし佛の慈悲 釋尊因位に戸毘王であつた時、帝釋天が戸毘王の智恵を試さうとして自ら鷹に變じ、毘首羯磨は鶴に變じて戸毘王の腋下に逃入つたのを、鷹追ひ來つて王に鶴を返せと迫るので、王は己が肉を裂き乃至身を擧げて秤に上り、以て鶴の命に代へたといふ。

○菩薩 諸佛の覺悟を得ようとして修行する大士をいふ。

○清淨池 清淨は、極樂淨土に在る八功德池に具有する八功德の一であつて、「俱舍論」には、甘・冷・軟・輕・清淨・不臭・飲時不損喉、飲已不傷腸の八功德

いづれ誠と分きかねて皆々興をぞ醒ましける、武兵衛住持を睨附て、「これ御坊、

女房狂いをなされるなら魚も定て參るであらふ、幸道で求めたる卵を是に持合す、

御饗應を申さふ」と袖の内より取出し杯に打入て「サア、お寺様卵酒一つ參れ」

と突附る、「何じや身どもに是飲めか」、「如何にもお七同然の八百屋の卵、參る氣

か參らぬ氣かで眞實の、底を洗ふて見る合點」、「ハテ疑ひ深い男じやなふ、佛祖

をかけてお七への戀は偽りなけれ共、邪淫は思案の外の事殺生戒は得破るまい」、

「イヤ~~~~、何程佛祖をかけられても是を飲みやらにや何時迄も、吉三

が垢は脱けられまい」、「ム、すりや是非ともに飲めじやまで」、「おんでもない事

きこし召せ」、「ハテ扱々々是非もない、ハアげに昔も例あり鶴の秤に身を代へし

佛の慈悲の古も、愚僧が今も菩薩の行此酒即ち清淨池、吉三が垢さへ脱けるな

ら飲んで見せう」と引受て、手に持初むる杯の朱を濺いだる血眼に涙は霰の如く

にて、武兵衛あんまり慘いぞや、久兵衛夫婦は大切な娘に浮名立てられし、其腹

立に如何様な無理無體も言筈じやが、寺檀の誼みによしなにも取合有筈を、難題

を擧げてある。

○寺檀 寺の屋敷。

○よしなにも取合はせよまやうにも話を取合はせて無事にさめる。

○物 暗に陰謀をさす。

◇このあたりの、住持の慈悲で力ある詞は、さすが永年戒行の善ある日蓮宗の高僧であるごしみるゝと感じ、敬虔の念に打たれるであらう。誠に海音出色の名文である。

○玄義。文句 玄義とは「妙法蓮華經玄義をいひ、隋の智者大師は智顛の說で、二十卷ある。所謂法華三大部の一。また文句とは「妙法蓮華經文句をいひ、之も智者大師の說で、二十卷ある。所謂法華三大部の一。

○色衣 僧侶の位によつて衣の色を定めてある。こゝは位高い僧であるので、かくいうた。

○無間 梵語阿鼻阿鼻の譯。無間地獄をいひ、墮獄の罪人は休息の間断なき苦痛を受けるが故にこの名がある。

○叫喚 叫喚地獄をいひ、八熱地獄の一。墮獄の罪人は獄卒から酷苦を受けて、常に叫喚するが故にこの名がある。

○伊蘭 梵語 Bandā. 樹の名である。この樹は腐爛せる屍骸の如き惡臭を放ち、花は紅色で、之を食へば發狂すといふ。諸經論中、伊蘭の林を以て煩惱に喩へ、芳香ある栴檀香木を以て菩提に喩へてある。

○赤梅檀 栴檀木の赤色を帯びたものをいふ。栴檀木は年を経るに従つて、白色から赤色を帯び、香氣愈々高くなる。故に白(びやく)栴檀・赤梅檀などの稱がある。

○泥より出でて泥ならぬ胸の蓮 「古文

いはるゝお手前が胸の中に物が有、搜して見たい物なれども、法師の身なりや是非がない、拙僧既に父母の家を離れて七歳より、佛の前に受戒して難行苦行師の呵責、誠に出家の文字の様、住家と定む宿もなく、雨露霜雪に身を痛め此處に馴るれば彼處へ行き、或時は飢に疲れ、玄義文句に眼をさらし四十有餘の此比は、色衣を著し敬いも一字の寺を司り、聖人とも言はるゝ身に卵酒を飲まそふとは、身どもが無間へ落つるならお手前は叫喚の、苦を受ふのが不便なはい、と言て飲まずば聽かれまい、伊蘭の林に交れども赤梅檀の香は失せず、泥より出でて泥ならぬ胸の蓮は宗門の、七字の首題只今の妙法蓮華」と一息に、すつと乾さんとし給ふを十内手を上「待つたく待ませふぞや、待とふ」と杯取て彼處へ投げ、吉三郎を取て伏せ、拳振り上「遠慮なく散々に打ければ、ヤア家來の身に推參な」と一腰抜かんとする所を、透間あらせす二つ三つ足の下に踏附て、「何が推參緩息な、親の安森源次兵衛見忘れたか」と懐中より骨桶出して差擧ぐる、踏まれながらに吉三郎振仰向いて、「こは如何に、親爺様は死なしやつたか」、「ヲ、サクエ、問ふも語るも恨めしや、先月二十九日の夜御切腹遊ばされた、忠義とは申な

眞藤「厨茂叔の愛運脱に、「運之出さ泥泥而不染」。

○七字 南無妙法蓮華經。

○推參 おして參るこゝの義。轉じて、無體な振舞をいふ。

○一腰 一刃。

○奈落 梵語 Naraka。地獄の意。

○恩にも三つの品がある ここには、親の恩、お主の恩、師匠の恩があけてある。「釋氏靈應」には、國王・父母・師友・檀越の四恩をあけてある。

○不義 男女の密通をいふ。

○八逆罪 謀反・謀逆・謀叛・惡虐・不道・大不敬・不孝・不義。

から御無念な御末期の、其中にても仰るは、言置く事は外にない何卒悴吉三郎が、出家相續する様に「十内頼むぞ」とて、家來に御手を合されしお志のいとをさが、骨に徹つてある故にお主を叩いた天罰も、踏んで奈落へ沈むのも身どもは何とも思はぬ」と、其儘其處に轉け伏して男泣きこそ、切なけれ、吉三郎は骨桶を手に載せて見つ膝に置き、「エ、變果たるお姿」と咽せ入く消へかへる、十内やがて起直り、骨桶を左手に持怒れる顔も其様も、別れし親の物言にて、「ヤイ悴の吉三郎、源次兵衛が冥途から汝に尋る事どもを、言譯あらば返答せい、形は人に生れても恩を知らぬは畜生よ、恩にも三つの品がある、差當つては親の恩、身を立子孫を養育するお主の恩は猶重く、文字を習ひ目を開く師匠の恩は取分て、大海よりも亦深し誓を以ていふ時は、親は子を憐めどお主には見替へぬ事、主は家來を養へど身に替へて最良はせぬ、師匠の恩は目前に汝が不義に代らんと、四十餘年戒行の譽も名をも顧みず、卯酒を參るのをめくとして見て居る事、畜生と言はふか、腰抜け者と言はふか、八逆罪の科人めよ、次に此源次兵衛、假りに勘當せし事某かねて若殿の、御爲に死ぬる覺悟故流浪させんも不便なり、亡

○自然 おのづからの成行き。ついひよつと何かの事。

○頼みし手前も恥かしき 親が汝を頼みにした。其の手前に對しても、汝は恥かしかるべき筈なるに。

○物越 人の聲をいふ。(見索引)。「倭調茶」に「ものごしし人の聲をいへり、物越にその聲を聞の義なるべし。近松作 源氏物語筋」に、「御顔色物ごしまで、たゞ、當分の物思ひに氣の滞りと存ずれば」。

○身を知る雨 思ひある身を知りて折からに降る雨の勢。涙をいふ。「女軍實記五之卷に、「身を知る雨」涙をいふ也。

○さめく さめ(雨)にさめさめ(漣々)をいひかく。

○すつば 盗人をいふ。「すつばのかはを見よ。

○うちづく おぢづく(怖附)の概。氣おくれして、うちづく。

○舌切裂いて 雜言した久兵衛の舌切裂いて。

からん跡も弔はれ度く、少しの事を言立に出家にならぬ其内は對面せじと此寺へ、追遣はせしは慈悲ならずや、其甲斐もなく今日明日と遁世を延ばす由、内々人の知らせし故末頼なき悴めと、眞實の心になつて勘當はしたれども、自然法師に成ならば十内我に成替勘當も赦してやれ、骨になりとも懐かしき顔に對面致させよと、頼し手前も恥かしき非義非道なる性根にて、親の爲に奉公せう武士になるのが孝行とは、よふも汝はぬかした」と、一度は怒り一度は又打萎れたる物越に、それはと答ふ詞なく、身を知る、雨やさめく」と泣て、俯向き居たりけり、十内涙押拭い、「親旦那の御意見が篤とお耳に止つたか、是からは又十内め推參を顧みず、一言申上ます」と飛退り手を突いて、「申吉三様善と惡とは北南足振變ゆる迄の事、それ程の儀は言はひでも辨への有御發明、殊に短慮なお生れ附、家來の者に人中で踏まれた事の無念など、定て遺恨に思すである町人づれの口先に家一軒を見込みじやの、いや盗人のすつばのと言散らされてきよろうつとうちづついで居る人じやない、コレ徒といふ大病に勇も武略も抜けましたの、昨日迄も今日迄も、千石取の御一子と崇め育てし此方をば、雜言せられし其時は、舌切裂いて棄



○忍びに ことそりも。

○流す目 ながし目に見ること。

○否にもあらず稻舟の 稻舟(刈稻を積んだ舟)の名のやうに、否(いな)いふでもない。「古今集」卷二十、東歌に、最上川のほれは下る稻舟の、いなにはあらず此の月ばかり。

○口なしの色にぞ出で 吉三・お七の兩人が互に物言はず、口無しであるが、その戀は色に出てる。即ち忍ぶれぬ其の戀は色に出にけりである。この文は「口無しを」榎子にいひかけ、榎子色は黄であるから、山吹の花色にかけて山吹の名所、井堤にいひかく。

○井堤 山城國綴喜郡井手町・玉水の邊をいひ、昔は山吹の名所。

○とても 何とにしても。

○一分 面目。

○御覺悟 吉三様御覺悟召され。

○渴仰 仰祈(おぼせ)の念を起すこと。

てふかと刀の柄に二三度も、忍びに手をば掛けたれど、いや／＼自分相應に大事

の娘を犯されて腹の立が道理じやと、のめ／＼置きて十内も腰抜けになつたぞや、

家來の恥は此方の恥、お前の恥は親御の恥此世で不孝し足らいで、又未來迄なさ

る、か、慾心でない言分にさつぱりと暇遣らしやれ、どうじや／＼、サア、／＼

サア」とせはしなく、問い詰められてうろ／＼と覺へず其處へ流す目に、お七は

顔を振袖の下から手にて物言はず否にもあらず稻舟の應とも得こそ言はれざる、

十内二人が口なしの色にぞ出での堪りかね、つか／＼と駈寄りて「コレ吉三様、

とても此方の性根魂曇りを磨く此刀、某が手に掛けて我も冥途のお供して、父御

の前で拙者めが一分立る御覺悟」と、氣相變へて見へければ上人中へ押隔たり、

「主に諫めは家來の役最前よりも有免す、臍甲斐ない此法師と末頼なふ侮りて、

近比過言聞にくし、出家にも佛にもなすべき我が親切は、先から目に見へぬか」

と氣色變れば十内も、吉三もはつと感涙の頭を、下げて渴仰す、武兵衛や太左は

何とやら小むつかしさにことそりと、立て行を十内は後さまに襟髪を、引つ掴み

引戻し「汝等最前親旦那を横著者の非道のと何者にか聞たるぞ、眞直に白狀せよ、

○御出家 吉三様が御出家。

○繰言 同じ事を繰返し、くだくしう言ふこと。

○ねすり言 いやみ。あてこすり。

○はて何とせう：是非ない 久兵衛の詞。

○も言やんな 繰言ねすり言をもう言ひやるな。

○生物 生かした實。果物。八百屋なればかくいふ。

○たばふ 貯ふ。「倭訓栞」に「たばふ」俗語なり、たくはふの略なるべし。

中之卷 (八百屋)

登場人物の主な者

- お七 (本郷の八百屋久兵衛の娘。吉三郎の愛人)
- お七郎 (吉祥寺の住持の弟。お七の愛人)
- 彌左衛門 (久兵衛の町内の者。お七を戀慕す)
- 杉 (久兵衛方の女中)
- 久兵衛夫婦 (本郷の八百屋。お七の両親)
- 太左衛門 (久兵衛の町内の者。武兵衛の友人)
- 武兵衛

改めて言はねども若殿様の御難儀を、身に被りたる忠義とは一國に隠れない、出放題なる囃言を能ふも吐出したナ、討て捨たい奴なれど御出家なさるゝ悦びに、命ばかりは助くる」と右左へ取つて投げ、起きんとすれば踏倒し逃る所を又蹴倒し、二十三十五六十腰も脊骨も立かねて、ほうく逃げて歸りしは心地よく又可笑しけれ、久兵衛夫婦も氣味悪くそろく出る玄關口、戀に泣子を引つ立て母が繰言ねすり言「はて何とせふも言やんな、生物類なら何にても、たばふて蟲は入まいに魚屋ならねば蛤の、口の開いたは是非ない」と呟き、てこそ立かへる

櫻 櫻

八百屋久兵衛の家では、餅搗や正月の支度やらで忙しい時にもかかはらず、お七は愛人吉三郎を思ひ出して、無常を觀じたやうに水晶の念珠を爪繰り、題目を唱へてゐる。女中の杉はこれを見て近寄り、「これお七様、このお祝ひの折に其の形は忌々しい。親御への意地張は善くありません。人の心は變り易いから、吉三様はもう貴女の事は忘れて、坊様になられたやら知れませぬ。それなのに何時までも義理立は損な事よ」と諫めた。お七「いや、吉三様は世の色好みの人と違ひ、私とは相互に初戀で、起請文までも取交はしたものを、ゆめ／＼お心の變る筈がない」とて、涙にくれる。其の哀婉な姿は見るもいたはしけである。奥からは久兵衛が杉を呼び、「泣く子も目をあけ。今日の餅搗は誰の爲と思ふ。年寄つた久兵衛や褌が正月を祝ふ爲ではない。類火に罹つて諸道具も調はぬ中に、例年通りに餅も減らさないで搗く事は、お七の爲に祝ふ親の心が知れぬか。嘸近所や一門の者どもは、奢りな事だと嘲るだらう。其の上へ娘にすねられてたまるものか。杉よ、お七の事は構はないでおけ。兩替町の調和殿鍼立の玄伯殿にお出でなさいと呼びに行け」と喚く。杉は形振繕ふ隙もなく、ぶつ／＼言うて家を出る。

吉三郎は、降り頻る雪に埋れる軒の下に簀笠を被て伏し、出て行くお杉の裾を引く。お杉「ヤア吉三様か。どうして其のあさましい様をして爰にごさる」。吉三「どうしてとは恨めしい。昔も今も貴い人でも、戀に身を棄すは世の習ひ。深草の少將は小町を慕ひ、百夜通ひの雨の夜の辛さは知らねども、この雪には身も凍えて、お七に逢ふまでの命も覺束ない」と、聲も細りて泣く。杉「コア、御尤々々々。こちらでも今まで貴方の事を話し合つて泣きました。幸に誰も居ぬから此處を這入つて、あのお七様の部屋の下に隠れて居させ。私ちよつと用たしをして歸つてから、いとし様に逢はせ申ませう」と、囁いて吉三を引入れ、急いで客を呼びに行く。

やがて町年寄彌左衛門は太左衛門と共に來たので、久兵衛夫婦は出でて挨拶し奥へ通す。彌左「お目に懸りました序に、武兵衛が事に就いてお願ひ申したい。彼は以前貴家とは懇意な間柄であつたが、近頃仲違ひな様子を聞いて、どうぞ仲直りをさせま

したいと存じ、武兵衛に其の事を話した所、彼も得心して、「久兵衛さへ合點なら、私は異存ござらぬ」とて、誠に結構な言分。それで今宵の祝儀を幸に、彼も後刻こちらへ參る筈。不寐ながら萬事私にお任せ下さい、お頼み申す。久兵衛「御宿老殿のお言葉に對して御無禮とは存じますが、畏つたとは申しかねます。私も類火の爲に丸焼となつてやう／＼寺に遁れ、再び御町内へ立歸り、何の貯へもなく途方に暮れてゐた際、武兵衛が來て二百兩を差出し、「この金は普請の用に立てさつしやれ。餘裕が出来た時に返せばよい。こちらからは催促せぬによつて、證文も入らぬ」と申しました。それでこれは忝いと戴いて、この通り普請も致しました。然るにこの十四五日前武兵衛が、そこにござる太左殿を仲人に立てて、娘のお七を所望されました。私もこれは良縁だと、満足に存じましたが、どうした事か娘が承引して呉れませぬ。いかに親でも縁の事は押附けるわけにも参りませぬので、其の返事を致しました。所が其の明けの日から、「金子二百兩を戻せ」と、毎日督促され、「金を返すか、娘を呉れるか、どつちか返事せよ」と、無體極まる使立て。私も如何に貧なればとて、金に身賣りさす娘ではございませぬ。何卒この儀に就いては思ひ止まつて下さい」と、腹を立てていふ。彌左領いて、「御尤々々。それは武兵衛が不埒だ。私だつて堪忍できぬ。然し物は取りやうで、あの吝坊の武兵衛が、二百兩を證文なしに貴方へ差出したのは、心底から御息女が欲しいと思ひ餘つての事。そして其の節御息女を呉れよと言出さなかつたからには、必定悔つたとも申されますまい。それに兔や角と意地張になつては、徳義上預つた金を待つて呉れとも申されまい。とあつて折角普請された家を、その爲に賣らつしやるもお氣の毒の次第。ここらを篤と御考になつて御息女を諭されたら、御息女の方でも得心されませう。何分お任せ下さい」といふ。久兵衛夫婦は町年寄の物馴れた言葉に、何と答へやうもなく俯向いてゐる。折から武兵衛つか／＼と入り來り、「皆様お待たせ致しました。ヤア横山殿、小栗判官と和解の宴の時は、判官に毒を盛つたが、今宵の參會には毒などは盛らつしやるな」と當擦る。久兵衛むつとすれど、金を借りてゐる弱みあれば苦笑して、座席に誘ひ奥へ入る。

お七は火燵に當り轉寐をしてゐるが、夢に魘はれて目を覺ますと、勝手では婚禮の支度をしてゐるので訝しがる。この時丁稚

の彌作は酒の肴を運びながら、「コレお七様嬉しいか。否の應のと言つてござつても、親と銀とは勝たれまい。吉三様が聞かれたら胸に火が燃えるだらう。燃える序に思ひ出すは、貴女は兔角火に御縁がある。火事故寺で、徒し、火事故今度の嫁入し、脾臓強い男を持つて雲雀のやうに細らんしよ」と、笑つた常談も、終にお七が火に身を焼く蟲の知らせとは、後になつて知られた。お七「父様母様恨めしい。私が心にどのやうな義理があるやら、親子の中で問ひ難ければ、人傳にでも聞いて下さるべきに、さうはなさらいで、活計ばかり思うて御理解のないなされ方、娘一人を捨てるのか。さりとほ餘りに憐いお心よ」と託つ聲は、縁の下なる吉三郎に漏れ聞えて共に泣き入る。母は奥から走り出で、類火に懼つて不如意になつた因果を懇にお七に説いて、「顔も心も憎體な武兵衛に添ふは世間の義理ぢや程に、飽かれるやうに身を持ちなしや。いつ離縁されても忝しと請取つて、其の時こそは打晴れて好いたお人に添はさうぞよ」と慰めた。そして若しもお七が自害でもしはせぬかと氣遣ひ、櫛篋の中を探して、缺・剃刀を奪ひ去つた。吉三はお七を諷す母の言葉に耳を傾けて、一々尤と頷き、お七を思ひ切つて明日は髪を剃落さうと決心したものの、見納めに今一度お七に逢ひたやと、そつと覗きかけては引込み、杉はどうして早う戻らぬかと、涙にくれて歎いた。又思ひ直して、いや／＼お七には既に武兵衛といふ夫がある。我が心の迷に邪淫の戒を破るも恐ろしいと、思ひ定めて簀・笠を捨て、名残惜しげに泣いて去る。其の後に杉が歸り、縁の下を覗き簀・笠ばかりあるを見て、吉三はお七の部屋に忍び込んで居るものと察して、障子を明ければお七一人泣き入つてゐるので、「はて吉三様は何處にござるか」といへば、お七驚き、共にあたりを尋ねたが見當らない。お七「杉よ、どうぞ吉三様を呼戻してくれ」と頼んだ。其の聲は心底から出た哀痛の叫びであつた。杉はそれとも氣附かず、お七を齒痒がり、「貴女が母御に諷された時こそ、心の内を言張らつしやるべきに、泣いてばかり居たのでは譯が分からぬ。それで吉三様は、縁のないものと諦めて歸られたのであらう。すれば私が呼戻さうとしても、吉三様は私までも水臭い者と思つて取合はれぬだらう。斯うなつたからはさつさと、武兵衛様に嫁入なされたがよい。お二人の爲に私が思つた事も水の泡となつた」と、捨言葉を残して去つた。熱烈な戀に悶えるお七は、最早誰に取附く島もなく、愛人との縁もこれで

切れ果てたかと、斷腸の念にくれ、孤愁・憤怒・失戀・絶望して遂に狂亂となる。割れても末に逢ひたやと思ふ心の一筋に、家が焼けたら武兵衛との祝言も取止みとなつて又寺へ行き、吉三様に逢ふ事もあらうかと、怖ろしい事を思ひ立つた。そして火燵の火を挟んで吉三が残した簀に包み、其の上に小袖を引巻き、戰慄しながら箱梯子を昇つて、車長持・戸棚の上などを見廻し、ほいと投げれば忽ち魔風戀風に煽られて、煩惱に身を焦がす己が餓よりも先に、我が住家は猛煙を上げて燃え出る。

## 評

歳暮の雪の夜吉三郎が、お七に焦れ其の家を訪うて、縁下に忍び入る條は、西鶴の「五人女」卷四、雪の夜の情宿の條の翻案である。西鶴の文では、吉三郎は青物賣に借し、板橋近い里の子と見せてお七の家に來り、降りしきる雪の中を里まで歸る事を嘆き、一夜の宿を乞うて庭の片隅に泊る。其の夜お七の親は、知人の内に男の子が産れたので、その喜びに出掛けた。その後でお七は青物賣りの子に近寄り、寐姿を見ると吉三郎なので、驚いて我が居間に引入れた。折から親が歸つたので、お七は之を悟られる事を氣遣ひ、吉三郎と私語すら出来ないで、あかぬ別れをするといふ事になつてゐる。それを改作して技巧を凝らしたものである。

又お七の兩親が、家の活計と借金二百兩の義理を立てる事との爲に、お七の嫌がる結婚を強要し、お七をして自暴自棄に陥らす條は、誤つた結婚に對する缺陷を暴露してゐる。この著想は、「久松袂の白しほり」などにも用ひた作者が得意の筆法である。

お七は吉三郎が置去りにした簀・笠に取附いて焦れ、遂に簀に火をつけて放火する文は、無智なお七の逆上させた心が能く寫してある。これは西鶴の「五人女」卷四、世に見をさめの櫻の條に、「逢ふべきたよりもなければ、ある日風の烈しき夕暮に、日外寺へ逃げ行く世間の騒ぎを思ひ出して、又さもあらば吉三郎殿にあひ見る事の種ともなりなんと、よしなき出來心にして、悪事を思ひ立つこそ因果なれ、少しの煙立騒ぎて人々不思議と心掛け見しに、お七が面影をあらはしける」と、簡潔で鮮かな筆によつて書き下されてゐる。

中之卷

○やよ柳：梅とのみ 正月の餅を揚ぐ時に、餅を小さく丸めて枯枝に附け、兒女の弄びました。これを餅花といふ。やい御の枝に附けた餅花は、もとの梢の雪ではなくて、餅揚ぐ宿の梅とのみ見るの意。

○諸葛 賀茂の祭の時、柱に姿を添へて、懸に懸け又は頭なごにかざすもの。この文は、大根も無も諸葛も見なし、千代を祝ふ意。「新拾遺集 卷三、崇徳院安藤の歌に、「菓なる千とせを添ふる諸葛しめの内には例にぞひく」。

○蓬菜 「日次紀事」正月元日の條に、「俗伶新年三方臺、置き海老髪斗昆布横櫓様等、先供賀客祝新年、是謂蓬菜」。

○八百屋萬の神 やはよろづのかみ(八百屋神)をいひかく。

○かがみ 御神體の象徴である鏡ミ、鏡餅ミをいひかく。「御藏の鏡ミは、藏にも鏡餅を供へるの斯くいうた。

○かちん かちいひ(揚敷)の義。餅をいふ。

○あたたけ心見を爰へ取子の引つ契り 熱情を見て養子にして娘と契らすべきを、ちぎり離すといふに、揚ぎあけた暖い餅に取粉をつけまぶしてちぎるにいひかく。

○色とは誰も水晶 色情の爲とは誰も推量するに、水晶の珠数をいひかく。

○題目 南無妙法蓮華經。

○中居 商家の女中。

○ひし ひし々(拉聲)の義。砕けること。破滅。

やよ柳、もとの梢の雪ならで、餅揚ぐ宿の梅とのみ、冬籠する大根も蕪も、千

代の諸葛、常磐堅磐の、交讓木や、橙・柑子・榎・搗栗、昆布・串柿商ひの店を

其儘蓬菜の、八百屋萬の神の餅・御藏のかぐみ・お雑煮の、かちんあた、け心見

を爰へ取子の引つ契り、契り解れて戀病の、娘お七は奥の間に、春をも待たず逝

年を惜むでもなし世の中は、無常と外へ見せかけを、色とは誰も水晶の願ひの玉

を手にかけて、題目繰つて居たりけり、中居の杉は差寄りて、一年一度の餅揚に

小忌々しい何ぞいの、親御様への意地張は却つてお身のひし花瓣、移ろい易き人

心先には忘れてござるやら、最早坊様になつてやら、知れぬ相手に義理立は、損

な事や」と諫むれば、聞へぬ事を言ふ人かな心の變る變らぬは、色品數多見盡し

近松作「曾根崎心中」に、「頼もしたてが身のひしで、囁きれさん

したもなれども。これに養餅をまかした。

○はなびら 花魁のやうな形した餅。西鶴撰「語體大鑑」

卷七に、「よしみの人より春の朝を知らせて、花びら、さいふ餅な

○色品 色々品々。ここはおもに戀の道の色々様々をさす。

○濡れ 情事。色事。

○徒競べ うはきのしくらべ。いたづら(徒奔)競べ。

○有様 ありのまま。實際。

○泣く子も目明いて泣くものぞ 泣く子も周囲の事情を見てから泣くべきものぞ。親が愚案にくれてゐる時などに、子が泣いたまて仕方がないもの意。

○祝ふのか 久兵衛や婆の正月を祝ふのであらうか、決してさうではない。お七の爲に祝ふのだ。

○飯 かしき(炊)の種であるといふ。木で作り、底に竹の葉を敷き、強飯を蒸し炊ぐに用ひる器。蒸籠「せいろう」。飯も仕舞ぢや「まは、強飯にするのも仕舞ぢや、即ち強飯にして、それを白に入れて揚ぐのも終りぢや」の意。

○兩替町 東京市日本橋區内、本石町日本銀行本店から正金銀行東京支店のあたり。

○あた 嫌忌の意を示す接頭語。(既出)

○中戸 店庭から奥庭に通ずる間にある戸。(見案引)

○袷 細紐をつけた竹籠。青物や種々な物を入れて運び運ぶに用ひる。

て濡れの巧者の徒競べ、吉三様にも我身にも戀の手習ひ血に染めし、起請の罪もあるぞかし、何しに徒になるべき」と、しやくり上たる顔容愛らしく又優しくも、重て返す詞なく「有様言へばお道理」と、眞眞めにさへ持つ涙、漏れて袂を濡らしけり、臺所より親方は「杉よ〜」と尖り聲「おのれは其處に何して居る、泣子も目明いて泣くものぞ、殊には今日の餅搗が、年寄つた久兵衛や婆が正月祝ふのか、類火に遇ふて諸道具も足らぬ中から毎年の、嘉例の通搗餅に小米一升減じぬは、生先のあるお七じやと子に絆さるゝ親の慈悲、近所隣へ聞へては奢りな事と譏るであろ、一門どもも笑ふであろ其上に娘に迄すねて貰ふは是非がない、構はずと捨て置け、やがて飯も仕舞ぢやげな男どもは隙がない、兩替町の調和殿鍼足の玄伯殿、お出なされと言て來いあた面倒な」と喚かれて、笠も足駄も取敢へず髪さへ今日は結ふ際の中戸口より呟いて、吹雪を凌ぐ前垂に走出たる軒の下「春も根芹も埋れて、雪重げなる簀笠に臥せる里の子哀や」と、言捨過る裾を引、顔差出すは吉三郎ハットばかりに立戻り、「こは淺ましき御有様如何なる事」と抱き附人目も分かず泣出す、吉三郎は押鎮め、「何故ぞとは恨めしや色故身をば



○百夜通ひし少將の雨夜の愛さ 深草の少將が小野の小町に懸想して百夜通ふ事を約し、雨の降る夜も降らぬ夜も毎日通うた度敷を、車の輪に刻んださいふ故事であつて、講曲「卒都婆小町」にも見えてゐる。

○渡りに船 その場合に當つて最も都合なことを。「法華經蓮王品」に「如渡得舟、如病得醫」。○釘になりたる手足 冷え凍えて自由のきかぬ手足。近松作「心中天の御橋」中之巻に「こりや手も足も釘になつた、父様の寝てござる火爐へあたつて暖まりや」。

○町の年寄 町内の公用雑事を掌る役で、町内で徳望あり資産ある商家の者を公選し、總年寄がこれを任命する。其任期は多くは三年で名譽職である。○「さしより」を見よ。

○相客 この相客の中には太左衛門も居る。

○挨拶 仲戒の意。

○跡からは見ゆる筈 武兵衛も跡からは来る筈。

寢す事、如何なる高位高官の古へ今も同じ事、百夜通ひし少將の雨夜の愛さは知らねども、雪に身内は冷へ抜きて顔見ぬ内に消ゆる身」と、泣く音もいづれ弱げなり、ヲ、御尤、此方らも同じ愛思ひたつた今迄言出して、二人が泣いて居りました、幸表に誰もないそろりと其處を這入て、潜戸を左へ五六間行けばお部屋縁の下、暫し屈んで居やしやんせお使に行て戻つたら、首尾見合て雪よりも積る事どもどちらからも、言ひつ言はれつさせませふ必さふ」と囁きて駈け行戀の道橋や、渡りに船の心地して教へしまゝに這入て、土に此身を打任せ釘に成たる手足をば、君が膚に打附て寝もせぬ内に睦言の、心工みぞはかなけれ、かゝる折節町の年寄彌左衛門相客誘ひ入来る、久兵衛夫婦悦びて、「コレハ、いづれも様、珍しからぬ響應に却つて御苦勞かけまする、さあ、奥へ」と手を取れば彌左衛門打笑ひ、如何にも參る上からは奥へも屋根へも通らふが、序ながら御夫婦へ願ひと云は武兵衛の事、組中と云平生に兄弟よりも懇志仲、俄に不仲な様子をば聞てさりととは氣の毒故、どぶぞ挨拶致さふと最前武兵衛に云たれば、ハテ久兵衛さへ合點なら、身どもに別儀ござらぬと結構な返答に、今宵の祝儀を幸に跡

○半櫃はんびつ 「和漢三才圖會」卷三十二、櫃の條に、「半櫃」に「ハンガイ」を傍訓してある。兩掛(天秤棒)の兩端に掛け、衣服などを入れて擔ふ(葛籠)の片方をいふ。

○しがく 仕舞。才藝の仕方の藝。物を儲け置くこと。夏山雜談卷一に「世俗に物を儲け置く事を、しがくするといふ。」しがくもないとは、何の貯へも無い意。

○普請ふしん 宋音である。もて佛家で普く同志を請來して、共に事を爲すをいひ、轉じて、建築工事をいふ。(既出)

○手形 借用證文。近松作「曾根崎心中」に「日頃語るはこゝらと思ひ男づくで貸したぞよ、手形もいらぬと言うたれば。」

○そこ 行届かぬ所なく。照なく。近松作「心中刃は水の朝日」上巻に、「そこ、氣のつく職人の、金出かす氣を格別なる。」

○ふつ かつふつと同じ。絶對に。下に必ず打洽の語に應じる。「神代紀」上に、「求之都、ふつに無所見。」

○曲げて曲がらぬ 曲けて從はずにも、さやうにもならぬ。

○立せがみ 立續けに強結する。續けざまにせびる。

○人參を盛らぬ 人參を服(の)のままぬ。人參は高價な藥品である。索引によつて「えびでの人參」を見よ。近松作「源氏冷泉御」下之巻に「毒藥を盛るこの類案。」

からは見ゆる筈、押附がましいやうなれど萬事は我等が貰ひます、御夫婦頼  
と言ければ久兵衛居直りて、御心遣と申さふか御宿老殿のお詞を、背くは慮外に  
候へども畏つたと申されぬ、様子は定しいづれもの御耳へも早入つた筈、私類  
火の砌には半櫃一つ得退けずに、やうく寺に隠まはれ二度お町へ立歸る、始末  
しがくも無い時節彼の武兵衛が尋來て、金二百兩膝に置預るでない遣るでもない、  
普請の用に立てやる手廻し自由になる迄は、二百年でも待つ金子手形取にも及ば  
ぬと、投出されたる嬉しさに思慮分別も入らばこそ、忝と戴いて、初めの如く  
そこ、迄、斯様に普請致せし事一門よりも大切な友達中と悦びしに、十四五日  
も以前の事それなる太左殿挨拶にて、娘お七を所望と有、夫婦の者は猶以満足に  
存れど、如何なる事か娘めがふつ／＼否と言放すに、親子ながらも此事は曲げて  
曲がらぬ道理故、其段返事致たる明けの日よりも金子をば、戻せ／＼と五度三度  
毎日立せがみ、金子が無くばお七をば、呉れるか有無の返事をと無體至極の  
使立て、如何に貧なる久兵衛とて賣買にする娘じやと、見立られたる無念さがど  
ふ堪忍がなるもの」と、聲打震い腹立る、彌左衛門領きて、段々至極仕つた、

○待つてとも言はれぬ義理 先方の厚意に對して、此方も徳義上待つてくれども言はれぬ義理。

○笑止 氣の毒い、たはしと同情すること。既出。

○横山 横山郡司信久をいふ。近松作「常流小栗判官」に、伊豆相模の領主信久は、我が子の三郎重次を聞き、我が娘照手姫の愛人小栗判官兼兵衛と和蘭の宴を閉くまで招き寄せて、之を毒殺したことが見えてゐる。この文は、その横山郡司信久を八百屋久兵衛にあてて皮肉を言うたのである。「横山殿會ひませぬ」とは、久兵衛殿長く無沙汰したとの意。

○小栗 小栗判官兼兵衛をいひ、横山の者等に招かれて毒殺された。この文は、武兵衛自身を小栗にあてていうた皮肉である。

○嵩にかかる 勢に乗じて人をおしつけようとする氣勢なるをいふ。

○乾 西北の間。この文の「乾」「いざ〜」「入り」にけるは、同じ頭音語によつた所謂頭韻法。乾と言つたのは、雲が東南の空に起つて西北に行けば天候荒れる意より、遂に感動の起るをきかせたものか。謡曲「熊坂」に「東南に風立つて西北に雲靜かならず」。

○かはらけ 婚禮に用ひる素焼の杯。

○蝶々 婚禮の饂飩には、紙で蝶を折つた飾を附けられはかくいふ。

○取肴 配膳に盛つて出す酒の肴。この語は「尺素在來」にも見えてゐる。

○ちつくり 少々。ここは、小さくなるに、ちつくりをいひかけた。

武兵衛が不屈じや、それや身どもでも堪忍せぬ、然し斯ふした事もある、沙汰に

及んだ者坊親の病氣に人參を、盛らぬ様なる慾者が二百兩と云銀をば手形も無し

に預たは眞から底から息女をば、欲しいと思ふ餘りの事、賣買にせぬ證據には其

節譯も言出さねば、侮ると云ものでもない、それに免や角意地張れば證文の無い

金子故、待つてとも言はれぬ義理、とあつて折角普請した家を賣らずも笑止なり、

此人譯をとつくりと言聞せたらお七にも、合點が無ふて何とせふ、平に〜と

物馴れに言廻されて夫婦の者、兎角の答言かねて差俯向いて居る所へ、武兵衛は

じろりとした顔でつか〜と仰し上り、いづれもお待久しかろ、横山殿會ひませ

ぬ、小栗が今宵の參會に毒など盛つて給はるな」と、嵩にかゝつた言分をむつと

はすれど是非もなき、金に巻かる、苦笑ひ乾の隅へ「いざ〜」と伴ひ、奥に入

にける、お七は火燧に轉寐の夢何とやら魔はれて、ふつと起れば勝手には三方。

土器・束熨斗、母は饂飩に蝶々の折据附て忙しげに、持行奥の高笑ひ、合點の行

かぬと見る内に丁稚の彌作取肴、手に持ながら差覗き、「コレお七様嬉しいか、否

の應のと有とても親と銀には肩骨が、已もちつくりあやかりたい、吉三様の聞か

○脾の臟強い 肝魂の強く精力旺盛なるをいふ。近松作「柳城酒吞童子」に「脾の臟強き大音にて、こりやびりめ。脾の臟は、胃の底部の外側に位する内臟である。

○雲雀 手足などの短せこけた者を喩へていふ。細々とした骨格を雲雀骨といふ。近松作「天神記」に「雲雀のやうなる腕先に、大の男が眞仰に地響打つて打倒されし。

○死ぬるといやと言放す 親は私わしに死なねばならぬやうな事をしむけて置きながら、死んではいやと言放す。

○事を好む 好んで事件を惹起す。事をあらたて。

○かつばと 烈しい物言をいふ副詞。ごすんごに見えなくならぬといふ鐘及び笠。「拾遺集 無算部に「隠れ笠をも得てしかな、來りて人に知られざるべく。この文は、隠れ笠隠れ笠でないか、人に見られるによつて、抱附きもできず、駈も立てられず、泣くこともできぬとの意。

○足摩り 足で地を踏み磨る儀で、あかく動作をいふ。おたんだ踏んで音いららつ。

○花 樂事。睡中に楽しい事をするを、陸に「寝て花をやる」といふ。

○器量 男の顔容をいうたのである。  
○世 全盛。  
○襟數 著物數の意。

しやつたら胸の火が燃ゆるであろ、燃ゆる序にお前程火に縁の有お方は無い、火事故寺で徒し火事故今度の嫁入し、脾の臟強い男持雲雀の様にならんしよ」と笑ひて走行にけり、お七は覺へず聲を上ナウ父様母様恨めしい、私が心にどの様な行かれぬ義理が有事やら、親子の中で問はれずば人傳にても聞もせず、死ぬるといやと言放す、事を好しなされ方娘を獨捨るのか餘りに慘い心や」と、かつばと轉び、泣聲が、漏れて誘ふ縁の下吉三は顔を差出せど、姿はさすが隠れ笠隠れ笠なら抱附いて、聲をも立て泣たやと、足摩りしてこそ居たりけれ、母は奥より、走寄り、暫泣て言様は、「合點の悪い娘やな、此身も一度は若盛り自分に花もやつて来て、惚れた惚れぬの術も知り、器量の好いと悪いのは老の目にさへ見ゆるもの、そなたのが皆尤故いやと言やるを無理にとは、今日迄言はぬ兩親が慘いとは言はれまい、世が世の時で有ならば、假令其方が合點でもあんな男を持たそふか、器量發明揃ふたる婿と並べて見よふ爲、分に過たる二十荷の箆筒・長持・襟數を、恥かしからず取揃へ、蚊帳は手織と急がしき、中に自から機上て織調し物迄も、類火に徒となりたるは因果な男に焦げ附いた、先生よりの奇縁じやと、思ひ諦め

○奇縁 合縁奇縁の意。合ふも縁、奇なるも縁で、心の合はぬ筈の者が其の實合縁で、いさう思うたり、心の合ふ筈の者が其の實不縁で、思ひ合うたりして、縁は不可思議なものと云ふ。縁づく。但言集賢に「愛孫徳縁り合ふも合はぬも縁によるをいふ、もと佛語に出づ云々。思ふにこの語は「縁縁縁縁」から採じた語であらう。

○閻魔の帳に附く 閻魔王に淫殺瑣積があつて、死者前世の罪を分明に算し出すといふ。閻魔王は死者前世の罪案を帳に書附けるもの俗説もある。但言集賢に「閻魔の應に就俗に閻魔の帳に付くといふは訛也」とある。

○等活地獄 八大地獄の一。殺生罪を犯した罪人が、この地獄に來て重苦を受けるといふ。詳しくは「往生要集」の中に見えてゐる。

○あどなき たわいなきをいふ。小兒なごの智慮なくて事をなすをおどなきといふ。

○君 戀しき君、即ち吉三郎をさす。

○永沈 沈淪して永久に出るこゝのできない場所。以て地獄のこゝにいふ。

○おろく ちやうしてよいやら醜態となつて心を取亂すこと。

○袖乞 袖に鉢を載せて米鉢を乞ふこと。乞食。物乞ひ。

○餓鬼道 三途(地獄餓鬼畜生の三惡道をいふ)の一。この界の有情は、常に餓饉の苦を受けるが故にこの名がある。「大藏法苑」に、「衆生因過去

くれよかし、ならぬとならば此家を銀の代りに突出して、出て行分は構はぬが親の難儀を顧みず、思ふ人には添はれまひよし添ふとも出家をば、引落したる罪科は閻魔の帳に附られて、火の車にて迎へられ等活地獄の火の中へ、生きながら陥められて煙の下に其人を、戀しゆかしと叫ぶとも甲斐なきのみか夫迄、奈落の底へ落すが何心中になるもの」と、威しつ、又は賺すにぞ、お七はあどなき心から涙の顔を振上げて「暫しも君に添ふならば此身は假令生ながら、火に入るとも厭はぬがいとしい人が永沈へ、沈むとあるは悲しや」とおろくするに力を得、母は猶々口説き立「そなたの返事次第にて、忽夫婦は袖乞の果は野の末山の奥、飢へ凍へて此世から餓鬼道の苦を見するものも、たつた一つの胸の内孝行な子は佛神の憐れみ有て後々は願ひの様になるものぞ、世間の掟は夫をば大事くと教ゆれど、顔も心も憎體なる武兵衛に添ふは世界の義理、飽かる、様に身を持なしや、何時去つてお越すとも忝しと請取て、其時こそは打晴れて好いたお人に添はせてやろ、親の難儀に暫の勤をすと思ふなら、吉三殿の目の前で帯紐解いて寝るとて懺悟之因、威現に餓饉之果、因果不徒、故名餓鬼有」。

○世界 世間。世の中。「武道傳來記卷四に、「今は世界に望

なし。○思ふなら 思うて得心してくるなら、難別の後は。

○談合 「なんかふ」であつて「なんがふ」ではない。かたりあひ。相談。

○何か定めん 何と心を定めたらよいか、定めやうもない。

○魂の緒 いのち。この文は、我が命の消えなら消えよかし、斯ういふことである。我が愛人に知らせて後に死にたいわいの意。

○關 塞き隔てるに、逢坂の關の「關」をいひかく。○逢坂 京都と大津との間で滋賀郡にある。昔はここに關所があつた。この文は、障子一重を明ければ愛人に逢はれるを、逢坂にいひかく。

○都度々々 くりかへして脱くさま。懇々々。

○發心 發菩提心の略。世捨人となつて佛道修業の心を起すこと。

○ふつ〜 かつふつ。全く。この語は下に否定の語を伴ふ。(既出)

○にし〜 につくり。岡山縣笠岡地方では、念を入れて咀嚼するを「につし〜と嚼む」といふ。蓋し「にし〜も」につし〜もとは同じ語であらう。

も淫奔とは思やるまい、合點が行たらあいと言やあいと言や」とて撫で摩り、「初心な心一つにて胸の内が捌けまい、追附杉が戻つたら母が無理か、理か、談合して返事しや、我身は奥へ」と立ながら心許なき親心、鉄・剃刀櫛宮の、中を探して持出づる、お七は更に夢現、何か定めん中々に、消へなば消へね魂の緒の斯かりとだにも其人に、知らせて後に死にたやと、障子一重を關の戸の、明くればやがて逢坂の道とも、知らず泣盡す、吉三郎は羽拔鳥手も足も無き心地して、漸そつとにじり出、涙を袂に押し拭いつく〜と、思案して、「母のつど〜言はれし一つとして無理はない、否とも應とも返答の無いは道理じや理じや、必々怨みはせぬ嫁入するも我々が、薄き契りも過去よりの定まり事と知らずして、うかうか何しに來た事ぞ親の命又師の目をば、暗まかしたる天罰の、忽當ると云事を、今と云今身に覺へた、あら物體なや怖ろしや、立歸つて明日は發心するぞふつふつと、己が事をば思やんな此方には忘れ果てたるぞや、さは言へ今宵來たと云、事ばつかりは知らせたい納めに顔がにし〜と、見たい事や」と這寄りて障子覗けば我影の、若しや勝手に見へんかとそつと退いては又立寄り、「杉は何とて戻ら

○ぐどく ぐうかうかど物思ひをうつけるまゝくよく。

○濡衣 無實の浮名。

○重きが上の小夜衣 「新古今集」卷二十、釋歌部に「さらぬだに重きが上の小夜衣、わがつまならぬつまな重ねをしもある歌に據つた。この歌の意は、一人の妻を持つたに佛法に對して罪であるのに、まして他人の妻を犯すことは尤もあるまじき事だといふのである。この歌を邪淫の戒の意に用ひる。

○つらら つら／＼(滑々)の義。水をいひ、又水柱をいふ。

○わくせき 「あくせく」(離殿)の轉訛。せはしく(せづく)こと。せせかしう思ふこと。

○仲人は背の程 お七と吉三との間を取持つ仲人を要したのは背の時分だけで、その後ば仲人なしの縁結び。

○祭が渡つた 閑事が済んだ。「好色三代男」卷三、戀知りの顔面狐の條に「自らに床こつて木綿布圍、古屏風に夢の情の祭渡して出づれば」。

○むつかる 債の義。情事についていふ。

ぬ」と又さめ、／＼と歎きしが、「ハア是も亦誤つた、お七には早武兵衛とて親の許した男あり、目を盗むは正眞の間男も同然よ、叶はぬ事をぐどく」と由ない浮名濡衣の、重きが上の小夜衣何の簀笠いらぬ」とて、左や右に脱ぎ捨て、涙のつら、玉轂袖を翳して出て行、斯くとはいかで、白雪の、道踏分ける高足駄、杉は心のわくせきと行違ひたる取形も、縁の薄さに見紛いて内を覗けば夫婦共、勝手に見えす好い首尾とやがて立寄る縁の下、簀笠取つて「是は扱、仲人は背の程、最早祭が渡つた」と障子明くれば「やれお杉、悲しい事が出来たは」と袂に縋りて、泣出せば、「イカニモ／＼そふである、もふ何ば程むつかつた、お脈を見よふ」とじやれかゝる、エ、面白さふに何ぞいの、戀しき人に逢ふ事の叶はぬ首尾になつたもの、脈が良ふても己や死ぬる、死なせてたも」と咳上ぐる「ハアどふやら拍子が違ふたが、まあ彼の人に逢ふてかへ」、「ナニ彼の人とは誰ぞいの」、「すれやまだ御存ないそふな、吉三様に逢いまして爰にござれと教へたる、所に簀笠有ながらお姿は見へませぬ、人が見附て去なしたか但私を待かねて、歸り給ふか氣遣な」と其處よ此處よと尋ぬれば、お七も共にうろ／＼と、彼方此方と見廻せど、

○似非笑ひ せせらわらひ。冷笑。

○何がさうした事ぢやもの 何がさてあなたが聞きほかりして、黙つて居た事ぢやもの。

○勸説 天皇の御おほせ。「説」は定言の合字。

○人目威し 人が見て、これではさうにもならぬぞ、思はせるやうに威すこと。

○水臭い 情愛深い。隔心がある。他人くさい。

○弁に結ふ 絆誓に結ふ。

○寝て花やる 寝て樂事を夢みて心をやらうとの意の流。もと蓮花を作るをね

かすこといふより起る。「狂歌作者部類に、「君と我寝て花咲かせ給はれと蓮の室の神を祈り」。



○冥途の坂 死出の山の坂路。

○お嬉しきうな顔 吉三郎のお嬉しきうな顔。

其甲斐もなき糞笠に、ひし／＼と抱き附き、暫し消入歎きしが、稍あつて言やうは、「いや／＼人が咎めたでも其方が遅い故でもない、奥には今宵婿入の早杯の取結び、母様最前爰へ来て様々の御意見を、否とも應とも得言はずに泣てばかり居た故に、それが心に障つてがなお歸りあつたものである、間のない事じや追附いて呼びまして来てたもらぬか、是なふ頼」と手を合す杉は聞よりゑせ笑ひ「何がそふした事じやもの歸らしやれいで何とせふ、親御であらうが王様の勸説にてもいやなれば、いやと言のが戀の意氣、朝晩泣てござつたは人目威しの偽よ、そふとは知らで此事を取持つ日からお二人の、如何なる御苦勞あそばすとも何處迄も引つ添ふて、奉公せふと思ふたは由なき案じ過しをした、私も一處に水臭い者と恨であらふもの、其中へは行かれまいもう今頃はお頭が、丸ふがななつてあろ、お前は明日から弁に結うて嫁入の御稽古あれ、男は持たずせめてまあ寝て花やろ」と立つて行、冥途の坂の腰を押す詞と後は悔しけれ、お七は内の者に迄恥しめられてしほ／＼といか様私が悪かつたついでい否々と言たらば、お嬉しきうな顔を見て今頃は寝て語らふに、どふ狼狽へて泣ては居た側からさへもあの様に、



○ 眺めやり 物思ひにくれて、ぢつと物を見やるをいふ。「ながめはながみる(長見)の眺、物思ひするをいふ。」

○ 仇の形見よ 戀しい人の發し置いた其の形見が、今は却つて我が爲にかたまつた。若しこの形見が無ければ、かうは心を苦しめぬものぞ。

○ 三國一 「三國一ぢや何々になり済いたしやんしやん」といふ小唄が、この當時酒宴の剛なで流行した。近松作「持天長歌集法」に、「兄が記儀の一節も餘所を釋る程低く、三國一ぢや藥茶になり済いた。」

○ あどない (既出)

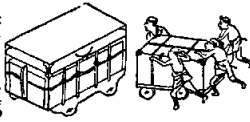
○ 燵 紅熱せる炭火。「燵名抄」に、「燵於炭火、猛火也、又盛也。この語、「お」は接頭語、「き」は火の聲があるので、起火の略ではない。

○ 箱梯子 段の下部が抽出し箱などに作れる梯子。近松作「曾根崎心中」に「箱梯子の二つ目より。」

○ 三悪道 地獄・餓鬼・畜生、これを三途ともいふ。

○ 車長持 「蒲州府志」七に、「形種大者、其處兩所施小車輪、滑而乘之、出入尙便、是謂「車長持」。」

○ 戀風 戀に心が煽「あふ」られるを、風に吹かれるに寄せていふ語。



〔綴所花の簾〕持長車

愛想盡かせば其身にはさぞやお腹が立たたであろ、言譯せふも詫びやうにも最早お出は有まいし、文も届けてくれまいし頼も綱も切れ果てた、あら懐しや戀しや」と、立て見居て見眺めやり移り香残る簀を著て、笠も被つて此様に、しよんぼりとした形をして爰に夫待つ水鳥の、翼にあらぬ簀笠は仇の形見よ取るも憂し、脱ぎも遣られぬ袖の雨、著て見ては泣き捨ては泣き、爰に歎けば座敷には三國一と言囃す、「婿とは憎や穢らはしやそれ故にこそ相思ふ中を汝に引裂かれた我が夫戻せ呼戻せ、さなくば寺へ連れて行け出家落して生ながら、火へ陥つても大事ない、逢いたい見たい行たい」と、形も亂れ氣も亂、亂れ心の、あどなくも家が焼けたら寺へ行、又逢ふ事のあらふかと、ふつと附いたる出来心そろり」と這寄りて、火燵の煖を四つ五つ簀に包み小袖にて、上を引ん巻さうろくと震ひ上がるや箱梯子、三悪道の通ひ道、二階は地獄の這入口、鬼は責來る身の因果廻り、くるくる〜車長持・戸棚の上、此處か其處かで見廻して、ほいと投げれば戀風に我より、先へ烟るらん

下之卷（牢舎前。道行。  
鈴の森刑場）

登場人物の主な者

八百屋久兵衛夫婦（お七の両親）

牢番の者

刑場の人夫等

彌左衛門（本郷の町年寄）

お七（本郷の八百屋久兵衛の娘）  
十六歳。吉三郎の愛人）

見物の群衆

吉三郎（吉祥寺の住持の弟子）  
十八歳。お七の愛人）

警護の武士

仕置の役人

梗概

八百屋お七は放火の罪によつて獄に繋かれ、今日火焙の刑に行なはれる事となる。母はいつもの通りお七に食物を差入れようとして携へ行き、牢番の者に拒絶されて立戻る。其の途中で久兵衛に逢ひ、差入れる食物を断られた事を語り、「地獄のやうな牢屋でも、今日はお振舞があつたのでござらう」といふ。久兵衛わつと聲を上げ、「お處刑の日にはお振舞がある。お七が命も今日限りだ。あれを見よ、柴薪が積んであるのは、お七を火焙にする支度だ。さても無慈悲な事よ」と、失心せんばかりに歎く。母ははつと驚き、悲しみ極まつて涙も出ず、「頑是ない小娘の爲た事を、どうして町衆は誑言して下さらぬか。代官様も何とかしてお助け下さらぬか。日親様は焼けた鍋を冠られても、法華經の功力で慈無かつたと聞く。日頃唱へるお題目の力で、お七が焼けずに戻る事はないだらうか。どうぞ雨よ降れかし、さすれば火も燃えまい。此の世に火といふ物が無ければよいに。あ、思へば三四年前からお七の縁談もあつたに、良い入婿もがなと、親の思ひ振は身振ひとなつてしまつた。娘持つ親たちは、假令娘に徒らがあつても、料簡して見逃したがよいわいの。今更悔んでも何事も跡事」とて、咽び入る。

久兵衛「オ、尤だ。然しお七は重い罪だから、町衆の誑言や代官様のお慈悲にも叶はぬ、とは知れども諦めかねて、法華信者でありながら毎日愛宕様を拜み、どうぞ娘の火難を救つて下さいと、頼を掛けたのも思へば、我が心の迷であつた。子に先立た

れて生甲斐もない老の身よ」と、共に伏し轉んで泣く。

折から人夫らが柱を擔いで通りかかり、「若盛りの美しい娘を焼殺すのは、いかにしても不便ではないか。あの娘の相手の若衆は今日まで何として尋ね來ぬのだらう」と、目を擦つて行く。お七の両親は怨めしげに其の柱を眺めて、「我が子があの柱に括り附けられて、焼かれるを見て居られようか、共に灰になりたい。お七は家を焼かないでも何とか思案が出なんだか。杉もお七を駆落させる氣も附かなんだか。我等も去年死んでゐたら、今の此の愛い目は見ないものを」と、絶え入るばかりに涙に暮れる。

この時町年寄彌左衛門暗涙に眼を瞬きながら駈附け、「親御の悲しみお察し申す。我等も手を盡して詫言を申し入れ、代官様もどうぞして助けたいと思召し、お七に言譯の仕様をくくめるやうに諭されましたが、年の行かぬ悲しさは、『吉三様に逢ひたさに火を附けました』と、言つてしまつた。其の爲に是非なく法に照してお處刑と極つた。最早どんなに悔んでも返らぬ事。それに就いて武兵衛めが此のごたくの中、二百兩請求の訴訟を致した。公儀で其の御證議があつて、『この事故にこの度の科人も出來た』とて、殊の外の御憎しみで、武兵衛めは只今牢に打込まれ、二百兩は其の儘久兵衛に下さるとの御上意である。せめてもこれに胸を撫下して歸らつしやれ』と引立てる。久兵衛手を合はせ、『それを承はつて少しは心がくつろぎました』と、悦ぶも哀れである。

お七の母「吉三めは何でお七の最期にも顔を出さぬのだらう。見ず知らずの他人でさへ、吉三が來ぬと誹るのが彼の耳には入らぬか。さても胸慾者め」と泣き感ふ。久兵衛「いや／＼人を咎めるに及ばぬ。お七の爲に誠の敵は我ら夫婦だわいの。學問立てる家でもなく、武士の一門持ちもせず、僅な八百屋商の者、その娘が徒らすればとて、さして恥にもならぬ事だ。娘が吉三を愛してゐるなら、お寺へ話して吉三を婿に貰つたら、今日の辛さはなかつたらうに、小家一軒建てようと思ふばかりに、娘の縁を結んだ。嗚娘は慘い死をさすと、最期に親を恨めしう思ふだらう。其の親がお七の爲に讀む千部萬部の御經よりも、吉三殿の一遍のお題目を草葉の蔭で喜ぶだらう。さて又吉三が此の場へ來ぬのも、お七に逢へばきつとお七の心が亂れて、臨終の

迷となり、先行きの妨となるを氣遣ふからであらう。我等の祈願は受けずとも、見物群集の御回向の功德で成佛せよ」と、涙に袂を絞る。

其の間に早處刑の刻限も迫り、拔身の鐘朝日影に閃く。お七の両親は我が身を忘れ斷寄らうとして、彌左衛門に後から引留められ、諫め賺されて連れ歸られる。足許もよろ／＼と進みかね、何處からか娘が呼ぶやうに思はれて、振返れば血の涙は眼に溢れて、横障の雲の隔てや腸を斷つ。

〔八百屋お七江戸櫻〕 お七は戀路の闇の暗かりに、よしない事を仕出して重い罪に極まり、母から貰つた念珠を首に懸け、父から貰つた法華經の一卷を懐にし、涙に暮れながら晒し者となつて、日本橋から引かれ行く。これを見る人毎に、顔を背けて哀れを催した。羊の歩みとほ／＼と三田を過ぎ、品川の海を望みながら、昔から刑場の地として知られた鈴の森に著いた。

この時吉三郎は、白装束を着て群集の中を押分け、お七に近寄らうとする。これを見た警護の武士は吉三郎を引留める。吉三「お七が罪を犯したものは、私の爲でござります。どうぞ共に殺して下さい」。お七之を聞いて、「いや吉三様、私が一人爲た罪だから悔んで下さるな。お逢ひ申して死にますれば心残りもありません。貴方は御出家なされて、幾久しう我がじき跡を吊つて下さいませ。申す事もこればかり。早うお歸りあそばせ」と、潔い言葉に盡きぬ名残を惜んだ。吉三も涙を隠し、「私を庇うて下さるは忝い」とて、役人の方に向き直つて手を突き、「科のものは私であります。急いで彼をお助けなされて、私をお仕置にして下さい」。役人「何を言ふぞ。代官所で詮議極まつた科人を、我等が計らひに叶はぬ。あの者の言ふやうに出家して、死後を吊つてやれ。急いで其處を立退け。仕置の時刻が移る」。吉三「この上は説方ない。生きてゐられぬ我が命。これお七よ、冥途の道連れに我先立つて待つぞよ」とて、腹掻切つて一本松が根の苔の露と消えた。お七行年十六、吉三郎行年十八。

お七が十一歳の時、湯島の天神に奉納した松竹梅の額は、彼の女の形見となつて見る人々の涙をさそひ、後の世までも哀れな戀物語となつて傳はつた。

お七が鈴の森で哀れな死を遂げる由來を、親の述懐によつて更に強調し、以て世間の誤つた結婚を戒しめたのは、作者が最も力を注いだ所である。そしてお七は最期に臨んで愛人の死なうとするを諫め、我が亡き跡を弔つてくれと頼んだ。然し吉三郎はお七の死に先立つて自害した。西鶴の「五人女」巻四、様子あつての俄坊主の條には、吉三郎はお七の死んだ事を後に聞いて自害しようとする。お七の親乃ち之を止めて、「(お七が)最期の時分くれぐれ申し置きけるは、吉三郎殿誠の情ならば、浮世捨てさせ給ひ、いかなる出家にもなり給ひて、斯くなり行く跡を弔はせ給ひなば、いかばかり忘れ置くまじき、二世までの縁は朽ちまじと申し置きし」と語り聞かせた。吉三郎も遂に之を聽入れて、出家する事となつてゐる。これは情死といふ事に就いて、兩者の考察の相違である。

要するに本曲は「五人女」巻四に據り、作者が好みな構想を凝らして脚色したものである。

### 下之卷

○ごもく處 ごみすては(井葉邊)。以て悪人の留置處に喩ふ。「様調架」に「ごもく處といふは、ごみおくの義、みおノ反も也。」

○窄 窄と同じ。ここの文は「窄」の字を分解して、お七が轡路の窄穴と、牛に乗せられて引廻されることいひかく。

○火焙 積み重ねた薪の上に科人を立たせて、首に轡の輪をはめる。そして火をつけるより前に、非人の者が科人の蹈める薪を足で蹴はずせば、科人の首がしまるやうにし、息が絶えた後に火をつける。それも蒸を燃して黒焦伊にならぬやうにするのである。

罪科の、ごもく處を窄といふ文字は轡路の穴冠、繋ぐや牛のお七こそ今日火焙と町々の、役人夜番柴薪歎きを爰に持運ぶ、煙は何れ變らねど、哀はいとゞまさりけり、母は今日さへ窄の飯持つ手も懈く足弱く、道も涙に見へねども我が手づ

○歎き 扱木をいひかく。

○さ( )までも。

- 思はば お七が思はば。
- 手に お七の手に。
- 心と 心と思ひなすを。
- ほとく 戸を叩く音。「古今著聞集、卷十二に、「門をば、く、こた、く。」
- 甲に被る 「かさにかざる」といふ。威勢ある者多頼みとし、其の威をかりてゐる。近松作「大磯虎推物語」に、「御使をかふに被て、腹外をする事侍の法なるか」。この文は「被」に「木」をいひかく。
- 木で鼻をこくる 木で鼻をかみこくる義。ナほなく情愛なきをいふ語。
- 立戻る 「身の毛も立つしを」立戻るといひかく。
- 軽い重いと 罪の軽い重いと。
- あやなし 文無の義。有帛のあや(文)の無いから出た詞で、わけのわからぬ意。分別がつかぬ。
- 居られづ 居られず。
- 進んだか 食慾も進んだか。
- サレバイノ さればなあ、その事について、思ひ合はせた意にいふ詞。
- 順義 道義に順ふこと。「脱陣八島」第一に、「殊に順義を申し、姉を申し入れて給はれ」。「傾城酒谷登子」第三に、「世の中の義理順義を知るが最期貧乏神が乗移る」。この文は、本獄の中は義理順義なやばあつたものでないと思つたが、矢張り義理も順義もあつて、理應のもてなしでもあつたやらの意。

からに煮炊きせし、物と思はゞ暫くも添ふ心地して嬉しかろ、自らとても此碗を手に觸れたりと聞ならば、それをお七と抱かへ逢ふた心と樂しみに、漸窄屋に辿り著き門ほとくと音づれて「お七が飯」と言入る、番の者の聲として「今日のお上の書付にお七が養い入らぬ筈、持て歸れ」と言聲も、權威を甲に木で鼻を、こくる下部も所がらぞつと身の毛も立戻る、向ふの方より久兵衛は歎きに軽い重ひとも、いづれあやなし暫くも、宿に獨は居られづと、よろばい來る老の杖「ア噴戻りやるか、ナニトお七は機嫌能う、物も食ふたか進んだか、どふじや〜」尋れば「サレバイノ聞かつしやれ、あの内でさへ義理順義振舞でもあつたやら、今日はお飯が戻つた」と、言ひも果てぬに久兵衛は、我を忘れて大聲もわつと叫びて、伏し轉ぶ、女房は取附て「けた、ましや何事ぞ、様子が早ふ聞たい」と總り責むるぞ違る瀬なき「ハテ泣とて別の事じやない、可愛ひやつと思ふから思はず知らずの落涙ぞ、さあ去にましょ」と包めども「イヤ〜」此方の詞の端、如何にとしても氣遣な、隠すも事によるもの」と手を取つて引留むれば、久兵衛包むに力なく「さすがは其方は女の身、様子を知らぬは尤じや、總て窄舎といふ物は、

○大法 死刑執行は刑法の最も大なるものであるから、これを大法といふ。

○扶持 扶持米、轉じて上(かみ)より下(さ)るる食膳。

○胴慾 さんよく(貪慾)の轉。無慈悲。殘酷。

○町衆 治安維持の方法として設けられた町年寄・五人組をさす。

○代官 江戸時代では、幕府直轄又は藩主の支配下の年貢・公事・人別等を管理する地方官を代官といひ、其の役所を代官所と稱した。此處は江戸であるから、代官ではなく、奉行と書くべきである。が江戸幕府を憚つて斯くいふたのであらう。

○日親様 日蓮宗の高僧である。足利將軍義教から迫害を受けて、活火に焼ける鍋を頭上に被らされても、題目を高らかに唱へて屈しなかつた。其の鍋は空に飛んだのではないが、日親様はこの迫害を受けても、屈しなかつたのだから、焼けたる鍋は空に飛び、さうしてもよい譯である。

○袂の下で數へたるお題目 念佛を唱へる數を、袂の下で數珠を爪練つて數へる事があるから、お題目もそのやうに數へたものと見たのであらう。

○さもなか さもなくば。

○八歳の龍女 「法華經・提婆達多品に、沙彌羅龍王の女八歳にして佛道を成就し、忽ち男子に變成して南方無垢世界に成佛した事が見えてゐる。ここはその龍神に雨を祈るのである。昔から雨乞には多く龍神に祈つた。

○雨車軸して 車軸の如き大雨を降らして。

「宇治拾遺」卷二に、「車軸の如くなる雨降りて」。

殺さるゝ日は大法で彼方よりも扶持が出る、お七が命も今日限り、あれ見や其處

な柴薪、若木の花を生きながら煙となすは胴慾」と、立寄つて杖振り上、叩いつ

泣いつ現なき、母は餘りに興醒めて泣も泣かれずうろくくと、「頑是も無しに爲た

事を何故お町衆は只管に、詫言して給はらぬか、代官様も料簡のないは餘り胴慾

や、頼をかけし日親様法華經の功力にて、焼けたる鍋は空に飛びお命悉無かり

しとや、夫婦の者が年月に袂の下で數へたる、お題目の力にて若しや焼けずに戻

らふか、さもなか母はどうせふぞ八歳の龍女様、雨車軸してたび給へ國土の内に

何時までも火といふ物の無かれかし世界の人の恨みにも、母には罰が當るとも娘

一人が助からは、情なしとは思ふまじ、三年四年前よりも仲人が来て彼方此方と、

似合の縁も有たれど、人手に置くが氣遣さに入婿取て何時までも、石に根繼ぎの

情愛が過ぎての今の苦しみを、能く見覺へて世の中の娘持たる親御達、假令如何

なる徒をも見逃しにして置給へ、我身は懲りて悔みても、返らぬ事が淺ましや」

と、大地にどうど打伏して消ゆる、ばかりに、見へにける、久兵衛は差寄りて、「ヲ

○石に根繼ぎ 極めて丈夫な事の喩にいふ譯。「石に根繼ぎ

の情愛とは、堅固であれかし、親が子を思ふ情愛。

○ぐどく (既出)

○愛宕様 芝罘愛宕山権現社をいふ。「江戸名所圖會」に、愛宕山権現社、世俗城州愛宕山と同じといへども自ら別なり、本地佛は勝軍地藏尊にして行基大土の作なり、永く火災を避け給ふの守護神なり云々。

○辦法 辨證正法の略。正法をそしめること。無理無法。

○子は三界の首枷 恩愛の情にはたされて、子は現世の手足まじひといふ意。「三界」とは欲界・色界・無色界をいひ、何れも有漏の迷界なれば、娶妾即ち現世の意にいふ。この證は講詞「百萬」などにも見えてゐる。

○現世未來を取外す 恩愛の情にはたされて、親は爲に菩提の道を求めないで、現當二世(現世と當來)を取外して迷妄の暗に迷ふ。

○柱 お七を括り附けて火焙にする柱。

○花ならば初櫻 西鶴撰五人女(西四)に「名はお七、いへり、年も十六、花は上野の盛り、月は隅田川の影清く、かゝる美女のあるべきものか云々」とある。

○月ならば二匁取り 初櫻の咲くのは、月はいへば二月で、それを二匁にいひかけ、そして一個につき二匁取る(二匁の便體頭にいひつづけた)。

○けつつかる 有る又は居るの意にいひ、總て人の所作を卑しめていふ語。蓋し「かつつくはる」の轉訛か。

○ひがいです 覆せ纏つて騎々しきをいふ。この

ヲ理じや去ながら、かりそめならぬ科なれば、代官様のお慈悲にも、町衆の詫言

も叶はぬ事と初より、諦めながらぐどくと我も迷ふて朝晩に、法華の數珠を掛

けながら愛宕様の方へ向き、娘が沈む火の難をどうぞ救ふて給はれと、謗法とは

知りながら、頼し事の恥かしや、子は三界の首枷とて、現世未來を取外す、悲し

き老の仕舞や」と、同じく側に伏轉び聲を、立てぞ泣きにける、かゝる所へ人夫

ども柱をかたげて口々に「何と不便に思はぬか、誠譬にいふ通り花ならば初櫻、

月ならば二匁どり、饅頭のやうな手足をば、在所で團子焼く様に火にくべるのは

惜しい事、それに相手の若衆めは何をしてけつつかつて、今日が日迄に尋來ぬ因果

はお七獨じや」と、心無き身も哀知る目を擦りてこそ通りけれ、夫婦は見上見下

して「よにひがいですな娘をば、あの柱へ括り附け四方から焼き立て、阿鼻焦熱の

苦しみをまじくと見て居られふか、共に灰とも成たやな可愛の者やさりとては、

火を附けずともどうぞ又、外に思案は出なんだか、駈落するといふ方便を、杉は

心も附けずして、我から、身をや焦すらん、年寄りたりし我々が、身は去年にも

相果てばかゝる憂き目は見まいもの、今は死なふも生けふにも、有にあらぬ世



語もヒガイといふ然(は)ぜこの類の魚名から出た。其の魚の形廻せし骨高きを以て、殊に癩人をヒガイスといふ。

○阿鼻焦熱 無間焦熱地獄。阿鼻は梵語で、無間と譯し、晝夜斷なく苦痛を受ける故に無間地獄といふ。

○まじく まじく。ありく。

○火を附けずとも お七が火を附けて家を焼かずとも。

○世界 世間。浮世。(既出)

○しやうね 性根と書けど、も正念から出た語であらう。

○年寄 町年寄の略。(見索引)

○いづれ ふうやら。

○眼が見えます 前に「足手願はし目くるめき」とあるに應じる。

○見つ 「見ず」の誤であらう。

○行方も知らぬ者 行きつく先も知られない者の義。但しこは、この者ともわからぬ者の意。

界や」と、足手願はし目くるめきしやうねなきこそ、道理なれ、所へ年寄彌左衛

門涙片手に駈来り、「ア、悲しうござろ尤じや、心一杯訴訟もするお上にもどうぞ

して、助けたふ思召言譯の仕様をば、くゝめる様に宜へども年の行かぬ悲しさは、

吉三様に逢いたさに火を附ましたと有やうに言放せば是非もなく、法の如くにお

處刑を悔みても返らぬ事、それに就いて武兵衛めが斯うした中に取ませて、二百

兩の金子の儀たつて御訴訟申せし故、委細御詮議あそばされ此事故に此度の、科

人も出来たりと殊の外の御憎しみ、只今罕へ打込まれ右の金子は久兵衛系下さる

るとの御上意じや、せめてはそれを力にして歸らしやれい」と引立れば、久兵衛

は手を合せ「金子に念はなけれども、娘を憂き目に沈めたる元の起りの武兵衛め

が、罕へ入たと聞たればいづれ力が附たやら、ちつと眼が見えます」と悦ぶも又

哀なり、女房は聲を上「此吉三めは如何なればお七が最期我々が、歎きを餘所に

見つ知らず尋來ぬこそ怨めしけれ、行方も知らぬ者迄も、口々言て誹るのが、耳へ

入らぬか聞へぬか、娘の敵胸愆者、情知らず」と泣惑ふ、久兵衛は押鎮め、「ア、

愚かの事を云人かな、お七が爲に正眞の敵といふは此方夫婦、學問立つる家でも

○千部萬部を讀んだりと 千部萬部の經文  
み讀んだりども。

○願うた後生は無けれども 我ら両親がお  
七の爲に願うた極樂往生は、お七が請けまいから御  
利益ごりやけはなれども。

○親の關 子をおふ道にまよふ親の關心。

○諸聲 お七の両親の語聲。

○夢の浮橋 夢のこゝにいひ、又夢の如きはか  
ない世の意にいふ。

○娑婆と冥途 お七の親は娑婆に残り、お七は  
殺されて冥途に行く。其の生と死との二道。

○引かれぬ足 ここの文は、親がお七を見よう  
と跡戻りすれば、彌左衛門はこれを制して先へ行か  
つしやれといひ、のつびきならぬ歩みの意。

○是を 次の文の「呪子鳥」の「呪ぶ」にかかる。

○江戸櫻 吉野櫻の異名。以てお七の美しいこ  
とに喩ふ。八百屋お七は歌祭文に「つま放身をほこ  
がすなる、五人女の三のふで、色もかはして江戸櫻、  
盛りの花を散らしたる、八百屋の娘お七こそ」。

○呼子鳥 郭公であるといふ。こゝは親が子を  
呼ぶにいひかく。

○お七こそ…仕出して 「増補」松の落葉  
(寶永七年刊) 卷二、四條河原宿八景に、「蘇文之色  
の盛りは普妻なる、八百屋の娘お七こそ、戀路の關  
の暗がりに、よしなき事を仕出して、罪は死罪に極  
まりて」とある。

○玉帯 帯草をいふ。草帯につくつてらみを掃き  
集めるによつて、「かき集めたる玉帯しごひかく。

なし武士の一門持もせず、僅な八百屋商して、娘が徒らすればとてさして恥にも  
ならぬ事、お寺へ言ふて早速に吉三を婿に貰ふたら、今日の辛さは有まいに小家  
一軒立てふとて、厭がる縁を結びし故、惨い死をばさするとて、最期に親を怨め  
ふもの、千部萬部を讀んだりと此方ら夫婦が吊ひは、露程も請まいが、戀しと思  
ふ吉三殿一遍の題目も、草の蔭にて悦ばん、扱又此場へ見へぬのは猶以の情ぞや、  
お七が吉三の顔を見れば心亂て生中に、臨終の迷ひとなり未來の程も不便なり、願  
ふた後生は無けれども見物群集の人々の、御回向の功德にて佛にもなれかし」と、  
思ふもせめて親の關、味氣涙の諸聲に餘所の、袂も濡にけり、早刻限と相見へて  
拔身の鐘のひら〜と、朝日まばゆく輝けば夫婦は共に叫びだし人目も恥も警護  
をも厭はず構はず駈出すを、彌左衛門より取附いて諫賺して漸と、歸るや夢の浮  
橋を娑婆と冥途の二道に、盡きぬ名残の袖の露跡へ戻れば先へとて、引かれぬ足  
の一夜だに泣音や、是を

八百屋お七江戸櫻

以てお七が罪科を皆引受けた身なるをいひく。

○見附 城門をいふ。城門の外方へ面する處の稱。

「香言字考節用集」に「多門、本名豊盛、俗云見付。お七が引廻される道の赤坂御門外・市谷見附などをいひ、所々に罪狀を記した捨札も立てられたのである。これに人が見附けるをいひかく。

○柳原野 神田川に沿ひ淺草橋に至る間を柳原通といふ。この當時は野もあつて土筆も生えてゐた。現今は古著屋軒をつらねた通である。

○つく／＼し 土筆をいふ。以て見物人が哀れに思つて心を盡し／＼にいひかく。

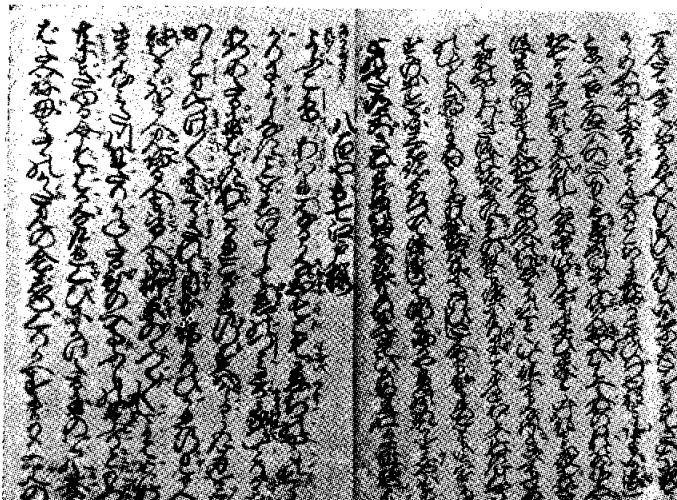
○丙午 お七は寛文六(丙午)年の生れであるとの説によつてかくいふ。この文は、「涙川の縁語によつて」渡りかねといひ、火刑に處せられて天壽を全うする事が出来ず、世を渡りかねた意。

○玉の緒の絶えなば絶えね 我が命よ、死ぬるならば死ねよかしの意。「新古今集 藤原、式子内親王の歌に、玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば、しのぶる事の弱りもどする。」「玉の緒」はいのちをいふ。以て緒に貫いた玉即ち數珠をきかせた。西鶴撰「五人女」巻四に、母親の珠數袋をあけて、胸ひの玉の緒手にかけ。

○帯木 「新古今集」卷十一、戀歌一の部の歌に、「圓原や伏屋に生ふる帯木の、ありまは見えて達はぬ君かな」とあつて、有るがやうに見えても達はぬものに喩ふ。(蓋し帯木は樅の樹の旁でたのが、遠方から見れば帯木の如き形に見えるが、近寄つて見ればそれに似た樹もないといふ。)この文は、「帯木」に母をいひかく。

かはり歌祭文

呼子鳥の、哀れなるかな、お七こそ、戀路の闇の暗がりに、よしなき事を仕出して、戀の罪科我一人、かき集めたる、玉帚あこがれ焦れ行末は、かゝる憂き身を此處彼處、見附、見附に、晒されて、日本橋より引かれ行、見



る人袖を絞る人、見返る人も皆人も、柳原野の、つく／＼し餘所目に餘る涙川、渡りかねたる丙午富士の、煙と、諸共に、消ゆる命ぞ、はかなけれ、首に懸けたる玉の緒の、絶へなば絶へね帯木の、形見の念珠繰返す守は父の賜はりし一部一卷後の世を、助け給へや南無妙、法蓮華經南無妙法蓮華經、何時しか君と馴れ馴染み、變るま

○一部一卷 法蓮經をいふのであらう。但し法蓮經は八卷

二十八品ある。

○小指を切る 眞實の心を見せる、即ち心中立てするしるしである。

○御げん 御見参の略で、女言葉である。「さりし御見」とは、過去の御面會の意。

○疊算 ぶうかすうかと思案して決せぬ時に、煙管などを鼻の上に投げて鼻の目を數へ、その數の丁(偶數であるか半(奇數)であるかによつて、心の惑をいづれかに定めるのである。

○惡所 遊里をいふ。「惡所通ひ」「惡所狂ひ」などいふ詞もある。「惡所は藝文」とは、惡所へは藝文通はぬとの意、即ち遊里へは變つて通ひはしない。

○徒し男 うはき男。好色の男。

○貧の盜みに戀の歌 貧に窮しては盜みをなし、戀に關えては歌をよむに至る。

○三十字一文字 和歌は三十一字なればいふ。お七は歌も詠んだ。「好色五人女巻四に、お七の辭世の歌「世のあはれ春吹く風に名を残しおくれ櫻のけふ散りし身は」が載せてある。(但しこの歌は西鶴の作であらう)。

○湯島に懸けし松竹梅 お七が本郷の湯島天神に、松竹梅及び名と年齢を書いた額を納めた。其の額は餘程後まで残つてゐたといふ。

○説經 既經祭文をいひ、其の節で語る。

○纜 乘(のり)の練語によつたものであつて、阿彌陀如来の御手に懸れる絲をいひ、其絲をひかへて彌陀に縁を結び引接を乞ふのである。

○我と火に入る夏の蟲 「飛んで火に入る夏の蟲」の意に據る。自ら求めて禍を取る喩にいふ。

ひぞや變らじと起請を、書いて取交はし、小指を切りて、血を絞り、互に語る睦言に、さりし御見の夜の雨、殿御待つ間の疊算、逢ふ夜逢はぬノヨ、イサヨ根みても、外に惡所は、誓文と、徒し、男の、徒事や、貧の盜みに戀の歌三十字一文  
 字書き習ひ、湯島に懸けし松竹梅本郷お七と記し置く、十一歳の筆の跡見し人あらば私の、形見と思ひ一遍の御回向頼み奉る」と、顔差入る、懐の、内より洩るる振袖に溜る、涙ぞ哀れなる、身は人屑といは言へ、笑はば笑へ一筋に、思ひ初めたる戀なれば、假令此身を貫かれ、骨は粉となれ灰となれ、魂は此世に留まりて、影に附添ひ身に移り二世も三世も我夫と手に手を取りて蓮華乗、法の纜切れ果て、我と火に入る夏の蟲、焦れ死とは、此事か、竹の子故に迷ふ親、冥加も知らず恩知らず、如何に若女といへばとて、氣儘に心持ちなしてあられ、少きしめじとは神も佛も、白眞弓三つ葉四つ葉の、嫁が萩、脛も現はに三田の郷、亂れし髪と諸共に、隨喜の涙遠近の、眺めは爰も鳩の海、漣波寄する品川や、イヨ、イヨ、イヨ、濱、に、入江の海人小舟、見へつ隠れつ、一霞ノあれ、から、先を、見渡せば、葦原雀口々に、科の善惡夕時雨、戀の邪魔する、男こそ、色の命をせ

○竹の子 「竹の子」に「子」をいひかく。八百屋であるから、以下の文に八百屋物をいひかけた、所謂八百屋物盗しの文である。

○しめじ 「玉蕈」に「示し」をいひかく。示しは見せしめの意。この文は、火利にあふは普通にはあり得べき事の少い見せしめこの意。

○三つ葉 みつはぜり(三葉芥)をいひ、山野に自生し食用に供す。それに白真弓の縁の三つ羽の葉矢ぞやしの三つ羽をいひかく。

○四つ葉 四つ葉草即ち「でんじさう」(蓼)をいふ。でんじさうは四小葉より成り、各地の池沼に産す。

○嫁が萩 はこねさう(石長生)をいふ。産なごに自生する羊齒類である。これに嫁をいひかく。

○三田の郷 芝區三田。

○隨喜 他人のなす功德善根を見て、これに隨同して喜ぶこと。心から有難いと感ふこと。

○鳩の海 中世以降近江の湖(琵琶湖)をいふ。「増補語林」後訓条に、「近江の湖をにはうみてふも如何なるよしぞや、…和名抄の此國の野洲郡に遠保の郡南北あり、若その方にて遠保湖といひしが、總ての名の如くなりけんかし。…この文は、鳩の海を品川の海のこにいうた。

○唐崎 琵琶湖の沿岸にある。こは、鳩の海の縁語に據つた。

○葦原雀 葦切(よしきり)または行々(ぎやうぎやう)し「もいひ、夏の頃葦原の中に居て喧しく鳴く小鳥である。よつて口喧しうしやべる者に喩ふ。

たしごみ、我は佛に成りもよし、振もよしなやヨ、イサヨ戀故に、命の峠、今暫し、暫し留むる人もなく、心も駒も忙しげに、行道芝も露ぞ憂く、引く足並の數盡きて、爰ぞ名に經る鈴の森最期場にこそ著きにけれ、

かゝる所へ吉三郎思ひ切たる白裝束、群集の中を押分く入目も恥ずつかくと、立寄らんとしけれども警護の武士に隔てられ、泣く音ばかりの問い交はし

「我故かゝる罪科は、淺ましの有様や此身も共に」と焦れける、お七は顔を振上げて「愚かにござる吉三様、我心から爲す業を少しも悔む事ならず、逢ふて死ぬれば今は早、心に懸かる事はなし、お前は命目出度ふし、御出家なされ亡き跡をよくく弔ふて下さんせ、言ふ事とは是ばかり早々お歸りあそばせ」と、名残に心亂るれど、人目を恥ぢて潔き、詞の中に曇り行目許に、哀れ残すらん、吉三

近松作「丹波奥作」に、「よしはら雀の鳴くやうに、良いきのありたけしやべつて」。

○色の命をせたましじみ 好色の我が壽命をせたましじみに、勢多颯をいひかく。勢多川の颯は名物である。「和漢三才圖會」卷四十七、介貝部、颯の條に、「按規江河皆有之、…江州勢多之產亦得此名。…こに勢多颯をいうたのも、鳩の海の近くに

ある縁によつたものである。

○命の峠 命の極まる所、峠は手向(たむけ)の香便で、楳に

○ず 語意を強める詞。蓋し「す」の約であらう。「死なんず命」とは、吉三郎が死なうとする命の意。

○科人 お七をさしていふ。

○露の世 露の如くはかない此の世。無常の此の世。

○花や月・雪・時鳥 花に、花のやうな若盛りの花をいひかけて、四時の景物にいひつづけた。

○なれも冥途の友となる 「なれ」は汝である。時鳥を冥途の鳥といふ。「俳諧裏時記菜草」に、「冥途の鳥」ほまゝ、さすの異名。時鳥よ汝も我が冥途に行く友となるこの意。近松作「生玉心中」に、「我は初音か時鳥、冥途の友と鳴き連れて」とある。

○武藏野の草の縁と色深き、浮名 武藏野の餘の森で、お七が無愛の爲に身を果した、其の同情が他の一般の人々に及び、熱烈な戀のお七の評判の意。「草の縁」とは、一つの關係から情愛の他に及ぶこと。「拾遺集」卷七、物名部の歌に、「紫の色には咲くな武藏野の草のゆかりと人もこそ見れ」。

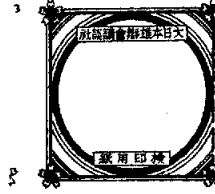
も涙押隠し「我身を庇ふ志、喜ばしや」と振り返り役人に手を突いて「科の起りの本人は私にて御座候、急いで彼をお助けなされ我らをお處刑下されよ」と、たつて申せど役人は「愚かや一度代官所で詮議極まる科人を、我計らひに叶はぬぞ、死なんず命を彼の者が望の如く出家して、跡弔らひて得させよや急ぎ立去れそれ科人、時刻移る」と下知すれば、吉三も今は力なく「生きて居られぬ我命、いで冥途の道連れに我先立つて待べし」と、腹一文字に掻切て露と消へ行露の世や、お七は今年十六歳吉三郎は十八の花や、月・雪・時鳥なれも冥途の友となる、戀に果して武藏野の草の縁と色深き、浮名諸國に弘ごりて、語り傳へる末の代に哀れは、盡きぬ物語

有共者行發者著は權作著書本

昭和十年五月十日印刷  
昭和十年五月十八日發行

釋義と真叢書  
傑作淨瑠璃身

製複許不



著者 樋口慶千代

東京市豊島區駒込五丁目九百七十五番地

發行者 野間清治

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

印刷者 井上源之丞

東京市本所區飯橋二丁目二十七番地ノ二

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

大日本雄辯會講談社

(振替東京三九三〇番)  
電話(34) 代表 五六二〇〇番  
牛込(34) 六二〇〇番  
五六二〇〇番

(本製地海天)